

# 川柳塔

昭和四十一年二月二十五日 印刷  
 昭和四十六年三月一日發行（每月一日發行）  
 第三種郵便物認可  
 創刊大正十三年 通卷五二六号



No. 526

三月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入) 一、ハリツトル詰・一、四一〇円

酒 日本盛 ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



# 大会 柳川忌回七郎生麻

日時 昭和46年7月11日(日) 午後1時開場

会場 御堂会館(南御堂)

電話二五一・五八二〇番

大阪市東区北久太郎町四十六八  
(地下鉄本町駅南出口から南へ二百米)

司会 西尾 葉

開会の辞 若本 多久志

挨拶 中島 生々庵

同 麻生 霞乃

講演 堀口 塊人

兼 演 兼題と選者

「麻」 福永 清造

「生」 増井 不二也

「路」 三条 東洋樹

「幸」 岡橋 宣介

「七」 近江 砂人

「塔」 中島 生々庵

(各題三句以内・席題はありません)  
★ご投句は七月一日着便まで。

閉会の辞 川村 好郎

会費 三百円。(記念品贈呈)

懇 会 千円。会場内食堂で懇親宴。

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

主催 柳塔社

舞初を鶴亀にする老の坂

四捨五入すれば芽出度い初春であり

正月の挨拶にだっで上手下手

賢妻ぶった言葉の裏で酒を酌ぎ

口上も教わった通りにして手品

中島生々庵

## お み く じ

勇敢な猪の絵で年賀はがきが元氣一杯おし寄せる。71年は猪突猛進の歳であるぞ、全員氣合をかけろと何処からともなく号令が聞こえて来る。にも拘らず私自身のエンジンは一向に始動せぬ。どうした事だろう。齡のせいかな等と思っても見るが、それだけでは解決出来ない面もある。かれこれしてる内に屠蘇の氣分も消えるし松もとれて一か月余が暮れて終った。世の中も元の無氣力さに似た静けさに歸り私の氣持もリズムを取り戻して来た。やっぱり余り騒々しくない、ぬるま湯み

たいなのが私の環境としては適當なのかも知れないなと、ふと思う。  
年末前から伝えられていた不景氣風を十日戎の吉兆におすがりする庶民の群集心に私は嘲笑を禁じ得ない。所詮は正面きってぶっかかりゆく外に手はない事に氣付かねばならぬのである。それには自分自身の充實という以外に道はあるまい。それに何ぞや、おみくじ引いて見る等、もつての外の神仏冒瀆である。

(生々庵)

# 川柳塔三月号目次

座右の句

一握りああ人生は和に如かず

(路 郎)

私の句

悲しけりやおいでと雲が呼んでくれ

松 川 杜 的

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

おみくじ

川柳塔……(同人作品)

白い金魚と

川傍柳初篇研究……(九十二)

前田喜代人・岡崎重義・清  
川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井 和雄  
十府・岡田 甫

風流雪女

近作柳樽

秀句鑑賞

(同人吟  
近作柳樽)

「旅人」以後の麻生路郎作品……(7)

近詠

成人式に

中島生々庵選……(1)

中島生々庵選……(4)

正本水客……(2)

東野大八……(22)

北川春巢選……(30)

川村好郎……(26)

若本多久志……(27)

高鷲亜鈍……(39)

諸家……(39)

## 白い金魚と

正本水客

人の心を見つめる羅漢眼を細め

白柳さん選の最後になった十二月号の九輪抄に載った私の句の一つであるが、<sup>1</sup>切後に速達で差換えて貰ったものである。

前の句は

災天に金魚の泳ぐ白を見る

であった。大きな金魚の朱が炎天の青さに白く画く残像を捕えて一寸面白いなと思っていた。処が投句の翌日、送られてきた「ひめじ」誌十月号の天守閣欄を見てみると、

炎天の金魚をしろく白く染め 北川 笹子が眼についた。少女の虚無感というようなものを金魚の白に托したものであると思う。私の句も内容的には全く違ったものであるが炎天、金魚、白と使われている字句が殆んど同じであり、笹子さんの句が先に発表されているので、一応取下げることになりし由を書き添えて取捨は白柳さんの判断に待つことにした。発表の結果は後から送った羅漢の句が採られていたが、果して金魚の句は独立した価



|                        |                |
|------------------------|----------------|
| 川柳五十三次……(一〇)           | 富士野鞍馬……(28)    |
| 句集「的」の書評……             | 戸田古方……(29)     |
| みそぶたわれに似たり……           | 東野大八……(40)     |
| 白柳氏を悼む……               | 市場没食子……(42)    |
| 伊藤泉睦さんを偲ぶ……            | 村田瓢太……(43)     |
| 同人名簿……                 | 津秋六花……(44)     |
| 雅号ぶっちゃけばなし……           | 本田恵二朗……(50)    |
| 初歩教室……                 | 川村好郎選……(52)    |
| 大萬川柳「胃」……              | 清水白柳……(48)     |
| 川柳家の暦……(三月生まれの人)……遺稿…… | (蕉風)……(54)     |
| 柳界展望……                 | (庸佑)……(56)     |
| 本社二月句会……               | (文秋)……(60)     |
| 各地柳壇……                 | 宮口笛生選……(46)    |
| 一路集「ビニール」……            | 松川杜的選……(46)    |
| 「理想」……                 | 池田古心選……(47)    |
| 「美談」……                 | (一三夫・葉子)……(65) |
| 編集後記……                 |                |

座右の句

古くとも僕には仁義礼智信

(路郎)

私の句

芸術の弥次馬として京が好き

阿万万的

値を持たない句なのか、白柳さんはもう私に教えて呉れない。

○ 亥の年の生まれだから猪突猛進型であり、羊年だからどうと言う感覚が迷信という以上に根強く人々の心に根を張っている。一体ある年の三六五日の間に生まれた人が皆な同じ性格を持つという考え方には私は反感に近いものを感じる。そもそも十二支とは、狩猟の生活から農耕の民に定着した頃から、月の満欠に基いて一年を十二に分けて十二支の呼び名が生まれてきたと聞いている。藤堂博士の言葉を借りると、子とは小さい種子のこと、亥は核であり草木の実も年の暮れにはシンが完成する意であるように、すべて植物の育つ段階を表わしたものである。

ところが子丑寅……というような字は農民の頭には這入りにくいので身近かな動物の名前を、子はネズミ、丑はウシというように当てはめたのがアジア全域に広がっていった訳である。その本家の中国が最近タツを削ってパンダと呼ぶシロクログマに替えたニュースが伝えられている。タツは皇帝を意味するので中国特産のパンダにかえたらしい。

タツ年生まれの人が、こういう風にクマの性格に変わってゆくのか、私の楽しみが一つ増えた次第である。



## 中島生々庵選

出雲市 尼 緑之助

師の軸をやつと見直す十日過ぎ  
お役所の払いは何となく伸ばし  
麻雀のルール徹夜を厳守する  
どちらがどうか公害と公德心  
ギャンブルの年始お祝儀も取られ

大阪市 橘 高 薫 風

風花す雪子が髪を梳くらしく  
長男の頭へ手を載せやすき背丈  
研究室の博士の仮睡夜汽車に似  
毛皮着て女にめぐる獣の血

住田乱耽さんを掉む

晩年という日のなかりける男

倉敷市 本 田 恵 二 朗

絵日記へ老妻皴まで画きとられ  
魂の抜けがらよく食いよく遊び  
妻の留守半身不随になりさがり  
とんでもない誤解ですよとうれしそう  
日本で二番目のようなホラを吹き

高槻市 若 柳 潮 花

初夢に逢いに来てさえ待たすひと  
元旦のテレスおむつとシクラメン  
冥途まで続く舞台の恋をする  
立役をゆずって春の舞台踏む  
ぬかるみにもごったままでネオン抱く

青森市 工 藤 甲 吉

東海に島あり天地人汚れ  
おめおめと男一匹愁訴する

これが最後の月給を妻拌む  
社員バッジ返し老兵消え去りぬ  
定年はまず女房へ謝しまつる

大阪市 本多柳志

除夜の鐘ラストは春の音で鳴り  
一票を予約して来る年賀状  
経営学積んで無配がまだつづき  
淀川の水の怖さを子に訓え

大臣伊勢参宮

かしこくも不作を祈るモーニング

堺市 河内天笑

この辺でバスが落ちたとバスガイド  
ひとり旅ひとりの下駄の音がする  
なんぼ飲んでも酒がおいしい不思議な夜  
白樺は触ってみても美しい  
会うことはもうなからうが名刺くれ

倉敷市 小野克枝

北陸加賀片山津温泉行き

雪を見に来た北陸の晴れ渡り  
九谷焼二割値切って買い過ぎる  
髪型を変えて今年へ身がまえる

性格の相違どちらでも正し過ぎ  
毒になる金も送って母である

大阪市 正本水客

振り向いて自分の影を確かめる  
名を知らぬ古寺のいらかある温み  
黄と赤と緑に染め分けられて山しぐる  
赤ひといろの紅葉に馴れて峠は風  
紫蘇めしの味を求めて古寺ひそか

大阪市 大坂形水

銀行をまんまと騙すえらい奴  
ひとりでに儲けたようにいう世間  
未来図の先き取りをして行き詰まり  
倒産社の社員狙っている求人  
案外に自分知ってる自己評定

八尾市 香川酔々

鳩時計鳴くのは勝手独り酌む  
肩書が知ったかぶりの口をきき  
竜王が不在で冬の流が涸れ

起きて飲みまた起きて飲むお正月  
福引で当たったのではない女房

倉敷市 小幡里風

ついてくる愚妻は僕の宝です

限界があり友達へ線を引き

順々に頭をなでて子は宝

賽銭の音を社務所で聞く平和

太鼓帯ママを見返す三カ日

高槻市

傍島静馬

春そこに哀れなニュース多すぎる

会釈して団地誰だか判らない

一見のふりでパトロン隅で飲み

心にもないこと云うて奢らされ

リベートに志操堅固があやしなり

今治市

越智一水

理髪屋が暮らしにふれる肌の荒れ

戦傷へ日の丸立てぬ意地をもち

ちびくれた筆面白字が生れ

母がいて神ごと仏ごと守る

先ず妻がことばを正すお元日

岡山県

浜田久米雄

流れ流れて故郷へぼろを着て帰り

情熱を包む胸とは知らず寄り

石段の途中で年は争えず

双方の未練電話がまたかかり

庭石の考え抜いた置きどころ

和歌山市 垂井葵水

電話ボックス透けて女の無言劇

義理欠いてからは敬語を使う仲

二次会を出てから恩師まくつもり

着ぶかれて足袋のコハゼがしまらない

幸運な賀状で松の内に着き

堺市 吉田圭井堂

マスコミを当てに押してる横くるま

一と昔ずらせて古稀を迎える気

セコハンを買って調律費に喰われ

四方みな海で泳げる水がない

かくしゃくと飲む日程もつまったり

豊中市 戸田古方

臆病やとうっかりここまで出なかった

朝酒も文句いわれずお正月

炬燵に入っているさかい水がうまい

公害を天罰やとは云うていず

山は美し新聞読めぬのもうれし

鳥取市 清水一保

野ら猫の根性 生きて行く目つき

黙々とつくしは冬を寝て居らず

叱られる方にも人生感があり

お目度と呼べは素直に笑む米寿  
初詣終つて本格的に寝る

下関市 石川侃流洞

猛吹雪鉄路を守る人の汗

花嫁を豪華にさせるシャンデリア

色足袋にかえてこまめな妻となり

忘れてた過去へお酒が触れる宵

唇を閉じてピエロが見せた意地

大阪市 山川阿茶

除夜の鐘去年の白粉落しつ

スベアーのない人生を書きつ

松竹梅お墓も正月待つばかり

あげ底にせねばソロバンもてぬ品

埋み火で焼くかき餅は禅めいて

大阪市 金井文秋

大安と云うのに死亡ゼロならず

人の氣に合わせ盆栽ひねくれる

若いなとほめたら孫の数を云い

女難とはよくわからずにうれしがり

根性が育たぬうちに職変り

東大阪市 久米奈良子

新春の机ひとりのものとして

アホになる術もさとれずうろたえる  
身上を守り通して泥くさし

セールの口舌にまけず家事多忙

若水に今年の願ひ二つ三つ

島根県 堀江正朗

手さぐりの最初若水汲みながら

遠慮する事も覚えて二十才

好きな酒きっぱりと妻病む間

病む妻の目に手さぐりのまだるすぎ

子らみんな出かけて妻の呼吸だけ

京都市 都倉求芽

シャッターが死の町並みにする10時

遠くから抛るけどえべっさん見といてや

おきもせず寝もせず地震止むを待つ

のし紙へ売場はひどい筆を貸し

球根をつけかえて咲く夜の花

藤井寺市 西 いわを

花火でも上げてみたい見合いの日

脳味噌の重たさ拘りなきものを

遺族を知らぬ会葬すまして来

肉眼で見透し利かぬ色眼鏡

梅志老一周忌

追憶は梅の蕾のかたき頃

大阪市 児島与呂志

さりげなく女をくどく口を持ち

ポケットの小ゼニ鳴らしてパパ帰る

底辺の汗十二月の匂いする

ボinasを運搬して来てなごむ膳

除夜の鐘聞きつつ夫婦の酒にする

大阪市 今西章雅

髪染めた妻銭湯の開くを待ち

ハイハイと妻へこたつを入れる役

ちよい借りの催促忘れていてくれず

筆不精賀状は楷書で書いてくる

上の歯を入れたら下の歯揺ぎ出し

大阪市 不二田一三夫

とある石屋の裏のあれは 墓地

ビューティー・フル女わすれた素顔の美

アイウエオいろのははじめも愛と色

寄席(二句)

タレントを消もう品として使い

荒稼ぎさびしく見てる老師匠

広島県 岩谷二三枝

こわしたくない夢だから遠くいる

否応もなるお手盛に坐らされ

鵜呑みしてから企みの餌と知り

不信への迷路さまようひとりぼち

倉敷市 野田素身郎

年賀状同期の桜の太い文字

書き添えた一句誤解の種となり

会えそうで会えず思わぬ人に会え

諦めてからでも三十分も待ち

普通寺市 岩田ひさお

心気一転無口のむつかしさ

暮し向きくらべ税金愚痴となり

エリート甥だけ便り未だ呉れず

自尊心とはこれかいな憤る

姫路市 村上春巳

四十路の酒はだんだんだらしく

その嘘をまともに紅い灯をくぐる

レジャーとは忍耐のいるバス旅行

ご出勤らしいハンドルお百姓

門真市 福島鉄児

ガード下高度成長とは無縁

どう云うてやろかと受話器持ち変える

その話半分嘘と知って聞き



日傭いの明日はどうでもよいお酒

米子市 八木千代

アドレスを消す指先も泣きかける

春の暦暮からめくる縁が来る

子を寝かす童話の国も深い雪

喘ぎつつ越した峠の視界澄む

愛媛県 渡辺曉童

友を見舞うて無事な生甲斐

六十すぎた寝酒朝酒

その年で無理とつまずきけなされる

次々と苦勞の種を妻みつけ

小松市 浅野芳朗

この次はマダム酌ぎそうあけて待ち

横断歩道ゆっくり歩いて睨まれる

草野球みんなで探すホームラン

役付だけ不動の姿勢で訓示聞き

笠岡市 木山遠二

おくりものして当分は安心し

北枕ボスも仏の相となり

長い読経柩がじっと聞いて居る

一ト月も経つと仏が板につき

米子市 林瑞枝

思い込む癖あり消しゴム効かぬ性

子と対話小さな断絶思う日も

エリートに哀愁孤独に耐えて笑む

気に入らぬ辞令を夫に励まされ

小松市 馬場魚山

退くつな日があり白髪見つけられ

よく笑う女気軽に返事する

クリスマス忘年会の気で出かけ

老鳥は籠から出ても羽ばたかず

兵庫県 河原みのる

俺一代でおわる行事へ注運を張る

殿りの猪は一生走らされ

死して尚カニの美エビの威うらやまし

金婚近し

開い 平和 呼々悔多し半世紀

西宮市 若林草右

安来節のように鰯はもうおらず

広告の団地はみんなユートピア

ご署名で集めカンパを押しつける

物価高つまみ喰いまで億単位

鳥取県 谷無閑

内情を母にたずねる婦人科医

折詰の鯛は残して土産とし  
漸くに元値で売って資金じり  
公害も強く云えない生活むき

高槻市 山田季賛

結局は意見を合わす低姿勢  
栄転をねらうコースへ君も居た  
屑カゴに残り蚊が居た暖房  
腹割って話せる先輩へたより

笠岡市 木山要次

暦売る子へ二三冊買うてやり  
ストープを全開にしてもてなされ  
家中がジャンケンうどんの方が勝ち  
泣けるだけでも女の幸せな

岡山県 田村藤波

初雪に転んでみたいほどに癒え  
宿命は怒濤に生き抜く磯の松  
好きな道歩めと父にある理解  
寶石がクイズで当った夢だった

東京都 増田次章

休日を味っている無精ひげ  
鈍行の運命急行抜いて行く  
身がまえて女が独り生きて行く

席ゆずる時を逸して目を閉じる

鳥取県 森田布堂

棺に蓋未練断ち切る釘の音  
肩書はこうだと胸につくバツジ  
末席の不満帰りに飲み直し  
貫録があり脱税も別にあり

下関市 志賀木石

戦友の歌乱痴気の座を鎮め  
スモッグに汚れていても春霞  
ついて来る息子へ生きる背を正す  
人間の性は悪なるうす笑い

高槻市 福田丁路

孫の守おせつかってジャンケンポン  
特価とは云えどダイヤはダイヤの値  
六〇の差がある孫の云うことにや  
伝統はゆかし振袖太鼓帯

岡山県 直原七面山

雨もまた良し恋の旅  
又疑われてる口上手  
働き蜂で父は満足  
ただ燃えるだけに生きてるよな女

倉敷市 水粉千翁

わらべ唄とぎれとぎれに雪積る  
集まればはずむ番茶の顔ばかり

新年

うららかに元朝の霜とけはじめ  
年賀状裏切るほどの数の山

大阪市 河井庸佑

親の身になってもほしい参観日  
せがまれてパート休んで参観日  
上には上いるのが社会と知りながら  
よく見れば小鳥も夫婦喧嘩らし

名古屋 吉田水車

あるじの亥首いよいよちぢみ寒椿  
改札へ来て人間のところでん  
降る雪の地に着くまでの白さかな  
一千万年前あっさり言うて考古学

下関市 中川晃男

ドラに舞う高脚踊りの長い袖  
赤い布つけて馬車(マーチョ)の鈴沓える  
靴下の脚が足袋はくめでたい日  
帰省子へ父は黙って風呂を焚き

下関市 国弘半休門

万歳の手から溢れる酒をつぎ

神徳にあやかる心白い足袋  
沓岐に来て大人の風を観てかえり  
反抗期叱れば黙まる娘で困り

神戸市 仲どんたく

良きパパがケーキと帰えるクリスマス

老無聊頼む二号に先立たれ

下戸の筈へ嫁ぐ荷にあるウイスキー

K君結婚

デュエットが茜に染める茅渚の浦

大阪市 木村水洞

冬に来て落ちつく京のかくれ里

肩書がとれてお世辞もうまくなり

震度三ぐらいで長屋おどろかず

元日も採めて長屋らしくなり

島根県 藤井明朗

酔い廻る雪は静かに降りにけり

いつの世もおんなと男歌日記

運勢は大吉金運は吉ならず

古稀へつづく情熱を川柳へ燃やし

竹原市 山内静水

瓦一枚寄附して寺から来た賀状

考えをかえて雑音うれしがり

面白いほど割り切ったからの金儲け  
寝言まで言うてと夢までせめる妻

大阪市 福井野迷路

忘れん坊のほかは無事なり八十寿の春

介錯を囑託殺人とぞ申す

人生の知恵とはつまり無知の知恵

地下鉄に昔の登山思い出す

兵庫県 遠山可住

相性が悪く一人が楽天家

女というところの中のもつれ糸

茶柱が立って出かける帯をしめ

人生の終りに内職が要った

神戸市 小浜牧人

元旦を関白亭主依然たり

放談の屠蘇が入った勇ましき

肩車見せてやりたい一心で

小出しするフアイト肋に骨がない

宝塚市 中村ゆきを

川村好郎先生ご全快を祝う

全快へシャンペン初春の音を立て

派手に来て派手に喋っている二流

おいといがないと云われて妻の阿呆

採めようもあろうに社殿の下で採め

八尾市 高杉鬼遊

七人の敵へ財布を確める

抱擁をすり抜けてゆく台所

二重価格どうなるうとも庶民なり

お守が守ってくれる空財布

尼崎市 高津徹也

嫁きし娘は幸せなりし花便り

その赤はあと旬日の花苺

麦青し農業を継ぐ決意

鮎釣へ一月早い竿みがく

奈良県 石倉旅風

七十の妙味行住座臥の裡

はがきよりペ書きたさの筆となる

初回には負けて八百長二対一

お隣も賀状で済ませ寝正月

大阪市 室谷徹舟

師白柳氏を悼む(二句)

暖房が消えて心に隙間風

マキシを着てる女に女が目

いい顔をしてるにサロンパス匂い

盆栽へ油断を詫びる大寒波

岡山県 大森 娛句楽

渋柿を甘くするのも人の知恵

墨絵でもこんな綺麗に萩の露

神域の神馬ヒヨロリと瘦せ給い

家柄の香りを放つ軒の梅

大阪市 天正 千梢

南無大師納め札を受け給え

穴うめた方が低姿勢

耐える勇気を離乳児が与え

その愚痴を神の前まで持って行き

大阪市 吉岡 美房

次に言う言葉をさがす酔っぱらい

酔っぱらいひとりになって襟を立て

猫ぼんとたたいてあくび立ち上り

窮屈な自由四角に住む団地

富田林市 岩田 美代

想うこと遠い所に新春迎う

逝きし人次々想う寒い夜

うつぶんの残りで柿の枝ゆすり

言い訳の見事さ思わずうなずいた

平田市 久家代 仕男

新春の突風山陰沿岸を襲う

ちぎれ舟 波 掃き溜めのように寄せ

高波が去ってやり場の無い怒り

初詣で一句

みこの手に千両光る縁起もの

現代っ子胤は要らないプラモデル

松江市 小林 孤呂二

負けて勝つ手も考え酌み交し

貴方ひとりのあなたでない愚痴をきき

過疎地もう雪猪の意にまかせ

出る杭のたとえに耐える日もありき

和歌山市 土谷 城石

イノシシに手綱つきたい年が明け

偶然の恩師へ譲るバスの席

寒がりのこれもやっぱり親ゆずり

どの指もみなそれぞれに持つ役目

岡山県 出原 敬一

農継いで借家の苦労知らぬ倅

僕の足気になる彼も松葉杖

背負われて父母の墓標に無沙汰詫び

親族の手向けに墓地の雪とける

島根県 小砂 白汀

空ら箱を積んで置く手も思いつき

踏ん張りのきかぬ股間を風が抜け  
秒きざむ電話へクシヤミ治まらず  
親切のつもりが痛いところへ触れ

小松市 四方天弘美

朝刊と一しよに投げ込む白い息  
公職にあつて仮面を使い分け  
読みもせぬ書籍が並ぶ飾り棚  
エプロンの白さ伏し目な市場籠

堺市 藤井一二三

今年また添えず除夜聞く察ぐらし  
初詣で神が呆れるほど頼み  
余り静かな新春でなんだか落ちつけず  
大阪一と関西一が競う店

芦屋市 丸川初甫

ショートカットがお似合いですと切り  
貯める気もなく現在高を見る  
過去現在未来の姿梅の花  
日曜大工きいた釘きかぬ釘

吹田市 岡田某人

あの花もこの花も嫌や歯が動く  
人の世に盃というものありき  
カレンダーの数字黙って押並び

猪の話に飽いて焚火する

広島県 高橋鬼焼

むきあえば女の言葉に負けている  
残り火も消えて団地に唄がない  
口笛がでそうな時に電話ベル  
松葉杖どうにかなれて松葉杖

出雲市 原独仙

資本家のご都合主義の一時金  
男には男の理解酒を酌む  
猟犬の功は無視され腕自慢  
米寿から見れば還暦小僧なり

和歌山市 西尾公作

結婚式恩師古庇あばき立て  
歩道橋に二の足を踏む寒がりや  
ミニの膝見つめ寒がり忘れて居  
公害の天に風糸のびなやみ

倉敷市 松下梁水

人生を意気に感じて酔いつぶれ  
不協和音そんな夫婦でまだ続き  
老骨の自嘲は勇み足ばかり  
兎の泪そこから先を叱らせず

松原市 谷垣史好

寒風に超ミニ小気味よい若さ

戦中派負け犬みたいなのが有り

釜めしは楽しマゴトみたいです

柱時計の音も冴えてるお元日

伊丹市 小川 静観 堂

猪鍋で仁田の四郎乾盃し

つまみ喰いと言えは旨いにきまつとる

七一年もミニがつづくとはたのし

三回忌これからが永いわが余生

竹原市 森 井 菁 居

初春やよし流儀は持たぬ花鋏

スコップもゴボウの意地をもてあまし

板橋の揺れに田舎の詩が残り

運のないサボテン素人に買われ

倉吉市 奥 谷 弘 朗

欲が出て白紙になれぬもどかしさ

女房へ急所あずけている平和

一生を手ごろなうそであやつられ

大阪市 西 出 一 栄

初詣りテレビに便乗お伊勢さん

一月五日仕事始め(二句)

初雪こんこ乾杯の声弾む

夫六回目の当り年

一徹の亥年に歩巾合わせて来

竹原市 小 島 蘭 幸

初仕事朝のひかりがまぶしくて

酔い醒ますコースパチンコ喫茶店

客は来ず集金ばかり来る日なり

桜井市 岩 本 雀 踊 子

人世に灰色と云うペンキ塗る

気の弱い男がぬれてる雨やどり

愚痴云わぬ妻へ笑顔がふりかえり

下関市 桜 川 不 水

十二月七日入院正月仮退院目下再入院中

退院の朝妻と酌む春の酒

老妻の皺くちやの手にあるぬくみ

死灰また燃えんとぞ思いタバコ断つ

東大阪市 竹 中 綾 女

春日野の淡雪踏んで初詣

七草の旅大屋根に雪残る

金魚池藻におおわれて冬静か

倉敷市 竹 内 翁 童

結論を云えば云えばとまだ続き

飛び跳ねる夢にはほ笑む車いす

手伝い来たのに上席へ座らされ

笠岡市 松 本 忠 三

中継を仲居にさせてご返盃

バス停の標識褪せて過疎地帯

受取った番号札にちびた靴

愛媛県 村上 旭 童

汽車通る度に目覚めてこは旅

百姓で終る気平和ありがたし

本当は眼鏡がほしい目にあわて

堺市 伏見 茂 美

新春（二句）

ほろ酔いの妻にやんわりからまれる

親という力が足りず子を思い

寒いのにすまんと犬は顔を見る

岡山市 川端 柳 子

多すぎる希望を神の前で捨て

帰省子待つ門灯は夜を徹し

プライバシー踏みこんでみたややこしさ

札幌市 平野 青 夜

公害に慣れて都会のボスとなる

コンピュータ信じたその日女つめたし

プラモデルパパこれだけに熱を揚げ

岡山県 池田 古 心

三カ日恒例にした風邪で寝て

嘘つきを承知で背負い投げを喰い

盗人も敬遠貧農錠もせず

大阪市 宮尾 あ い き

還暦の肌初風呂で若返り

ふり分の肩の初荷へ雪が舞う

福笹はきれい所で買うとする

岡山県 横山 一 声

踏切りの長蛇を横目に長い貨車

行く末をたのむ息の嫁をより

ねぎ安くして呉れ肉を買わされる

呉市 林野 甦 光

仲人の嘘も承知で嫁くあせり

雑音を背に若者の正義感

肩もんであげようホステスのおせっかい

倉吉市 藤井 春 日

しっかりしてるとは他人見て呉れず

お茶引いた小雨の夜を便り書き

三枚におろさせアラまで持ち帰り

大阪市 中川 滋 雀

秒針へ今年の春が明けてくる

停年の疲れが靴に鳴る朝

サインペンすらすら金を借る署名

宇部市 平田 実 男

長男の腕力嬉しそうに詫び



他人にはハイハイハイと素直な子  
性教育薄々知ってる目に出合い

笠岡市 出原真奇

白柳先生を悼む（一句）

賀状書く数がだんだん減っていき

菊の香を背に元旦酔ってます

春めけば年寄り遍路に出る話

奈良県 草深醉升

ウーマンリブ金と暇とがあり過ぎて

今年こそ思えど無職まだつづき

世を勘ねて若い身そらで禅に凝り

守口市 羽原静歩

あるだけの嘘をならべてきらびやか

稼いだら稼いだだけのおらが春

PPMうつ手ないのか空の彩

和歌山市 野村太茂津

石の美を盆栽しかと抱いている

初出勤敵は幾万ありとても

良いことがあり熱燗の妻が待つ

香川県 岡田拳法

することはしとこ神さま見てるやろ

神さまがなんや気になる年かいな

わめいてもどうにもならん祈っとろ

岡山市 光好陽子  
北風が笛をふきふきやって来た  
いん居して少しピントがはずれかけ  
元旦はめでたい廃墟に似て静か

大阪市 有信新之助  
もうしまいだすとライトバン洗われる  
襟足のほくろがきれいに降りて行き  
ねぐらはあるらしい大きなバッグ行く

富田林市 浅川八郎

参宮初詣

初春の赤福餅に幸を知る

退院して

余命今絶えなんとして未だ絶えず

退院へとられた足を再考す

八代市 永松道雄

猛進の猪突人生踏みはずし

値上りのブームになやむ貧乏神

九死に一生得た喜びの神詣で

松江市 柳楽鶴丸

七人の敵がいるからわくファイト

知りません存じませんそうですか

妊った犬に縁の下を貸し

奈良市 宮口笛生

俺だって金さえあればもてるなり

ふるさとが倍にふくれた色瓦

貨幣価値女こまかく生かすなり

兵庫県 大江秋月

差出人が一緒賀状二枚来る

大根も威ばってならば物価高

自家用車置く場所はありまだ買えず

大阪市 西川誓二

もめている土地に霜の白きびし

仕事にもリズムがあつて調不調

年輪にも詩があり風雪に耐えた跡

美禰市 安平次弘道

過疎対策公害我慢させられる

頂点に立つて孤独をかみしめる

下車駅が近い女のコンパクト

堺市 新谷笑痴

成人の祝いの席に父の皺

二十年昔を戻す灯を囲み

松とれぬ内から白紙がある日記

鹿児島市 土岐トク子

羨望を否定する気がふりかえり

追い込みの浪人シヨルダの肩もきれ

受験期に父も一役買つて出る

堺市 高橋千万子

床の間に日の出を掛けて除夜のかね

追伸の一言うれしい事がある

秀才に選手になれと父貧し

大阪市 宮地双楽

生きているが能ではないと腕をくみ

壁を塗る手付きで下戸が猪口を伏せ

ふる里に墓参も絶えて二十年

東大阪市 竹中肖二

老醜でもよい算盤棄て切れず

つくづくと老かみしめて隅に居り

恙なく孫と遊んだ三カ日

鳥取県 川崎秋女

平凡を希う五十路の初詣で

お世辞さらりかわして戻る年の功

やんわりと言う催促へ負かされる

貝塚市 野坂つき子

開運と出たおみくじに賭けてみる

親切をたらい回しにして平和

四季のない室で無理やり開く花

姫路市 隠岐不酔

吉と出たみくじへキッスして結び

釘でさえ素人玄人をよう見分け

松江市 岡崎祥月

男一匹いのししの運に勝つ  
相性は火と水にしていって平和

奈良県 西辻竹青

すまないがと下から出ればつけあがり  
皆遅刻正直に来て待ちぼうけ

大田市 藤田軒太楼

時の氏神孫が顔をみせ  
一言の不足あれから顔をみず

西宮市 島居百酒

加護祈るお墓線香が煙むたから

伊豆旅行

年の瀬に富士は日の出を待つ姿

諫早市 原田明春

給食のカレー人參だけのこり  
林道がついて木の価がはね上り

川村好郎

★ 三寒四温くり返してこそその春

根気よう来たと医者のはめてくれ

公害の老松にもある新芽

ハンカチをそっと貸すのも愛のうち

伊藤泉陸氏逝去

これからを数多遺して発つ栢

若本多久志

年頭感詠

美しき老後をめざす古稀樂し  
悟ろうとするよこしまの念仏か

紀伊旅詠

拝むよりカメラを向ける波地藏  
鐘の音が入江に沈む五ヶ所浦  
養殖のいかだ動かず初春の海

北川春巢

手のヒビがぼつぼつ治る春の風  
漫画から妙な日本語はやり出し  
旅馴れてともかく宿の按摩呼ぶ  
仲人が趣味といわれるほど忙し  
ボウリングのルール知らぬを恥とせず

西尾栞

二日から書斎の癖をとりもどし  
街灯の列駅前らしく灯り  
ケーキめきて椿の花の霰かな  
夫婦でも自慢話はききづらし  
落葉降る庭に佇む老の幸

菊沢小松園

嘘を聞きながら靴ペラ手をすべり  
握手もう他人では無い握りよう  
土壇場の女視線を撥ね返し  
嘘のない極樂笑い声もなし  
一たんは拒むつもりがそのまんま

# 川俣柳 初篇研究

(九十二)

564 書ている側に野郎の根付也

龜遊

清川女郎が客を振る手の一つとして利用するのが手紙書きである。

枕元わき目もふらず書いている 傍二2  
そこはかとなく書き続けるけちな晩

安九鶴1

寝たふりを心で笑い文を書き

傍五7

「根付」は腰巾着という意味があるが、手紙を書いている女郎のそばにつくねんとしている男、それが目の前にうかんでくるようである。

藤井川礎稿の通り「側に野郎の根付也」が圧巻。意久地ない腰巾着を根付とは痛快。また根付は寝就くにかけている。

川端川賛。振られた客の姿が想像できる。

高須川根付とは、正しくは「巾着・煙草入・印籠などを帯に挟んで腰に下げるとき、落ちぬようにその紐の端につけるもので、一名「おびはさみ」(広辞苑)で、女郎が文を書いているそばに、根付の寝牛の形でマジマジとしている男を諷した句である。

その男が寝就く度胸があれば大したものだが……。

前田川根付は根付時計、即ち枕時計(懐中時計)の意にとりたい。この句からは時間的な感覚が感じられ、腰巾着では私にはピッタリでない。

岡崎川礎解贊。「根付」は高須説が正しい丸川同右。

岡田川句意の大たいは礎稿でいいと思うが「野郎の根付」にひっかかる。「根付」は高須説の通りだが「野郎の根付」とはどういうイミか、これが解決されない限り、この句の正解は得られないし、解決済みとは参らぬ。というのは当時「野郎の根付」という流行語があったのである。

565 椎の木といつて売色にならふか

一 甫

清川「椎の木」は松浦邸にある有名な木。松浦邸に行くという口実で吉原にくりこもうとしている武士を詠んだものと解してみたら「売」を「買」と解してよいものかどうか自信がない。

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

藤井川売も客と売り手の差で買色のことだろう。「椎の木」といっても決して遊びのことじゃない、そう気をまわすなよというところ。聞き耳たつた女房への弁解？言葉の調子だと武士だが……。

高須川当時は「売買」「貸借」はどうも混同したおもむきである。この句の「売色」も「売春」「売女」と同じく売るから買うので、句意に別はないものと思う。ただ椎の木といっただけで、その下を通して色を買いに行ったことになろうかというむずかしい句だが、三面子先生は「俳諧の表と裏」と禅問答みたような解をしていられる。たしかにこの句には禅問答の気味がある。

前田川藤井説と思うが「ならふか」が不安だ。「成ふか」「習ふか」ではちがう。

丸川字義は椎の木といったものでは売色になろうかというのであるが、明確な句意はわからない。この椎の木は礎稿の椎の木屋敷の椎売色はもともと売春と同義だが、川柳では余りお目にかららない。「売春を一向

しらぬうつけもの(明七梅一)——間男  
はそれである。本句の場合にはもつと複雑な意味をこめて使っているのではない。大體磯稿の如く、売るのは口実、椎の木を口実に吉原に遊ぶ——それを椎の木の側から直接的に売色といったのであろう。さくらとか月とかもみじとかなら吉原行の口実になってつぐだが椎の木といったのではびつたりしない——と一応解しておく。

岡田||これは三面子先生がいわれているように俳諧に関する句。江戸の俳諧師一覽表みたいな「俳諧ケイ」などには、各宗匠の選んだ句をならべ、その上欄に、その宗匠の好みを書いてある。例えば深川湖十のくだりには「強弱交るべし。神釈・賈色・人名・武術之句」などと書いてある。とにかく「賈色」は「賈色に関する句」の意味で俳諧用語。句の椎の木は磯稿で述べているように隅田河畔の有名な木で猪牙舟で吉原に行く人が必ず眺めたもの。だから「椎の木とだけ詠み込んで賈色の句になるかしら」と俳諧仲間には質問したという句であります。

566 ほとけの世話をやき過てかんづかれ

万 融

清||葬式の時に或いは死んでから葬式の準備に至るまで、後家さんになった内儀に代わっていやにまめまめしく動く男がいる。そこで周囲の人々はハタと気につくことがある。なる程あの男が間男だったかと。

高須||「仏の世話をやきすぎた」が面白い。「後家の世話」ならそのものズバリだが、それをワザワザ一手多くして「あの男と私は親友だった。呉々も後を頼むといわれていたの……」なんかと持つてまわって、ズルズルと入りびたりになる。悪くいえば「死後姦通」だがよく言えば「亡友援助」である。が、もとを洗えばともと出て来た二人の仲なんでは罪が深い。

親類もないか間男施主に立ち 一・三  
御亭主が死んで逃げるが……になり 八・六  
うまいことするは仏の女房なり 天明

丸・岡田||磯稿に賛。

567 間男をとかまへたあす質を請

一 甫

藤井||間男現場をとらえた場合の内済料は「間男七両二分」だが、下落して五両になったらしい。従って川柳にも料金は二通りある。

間男のからだ一尺が一両 一七・39  
すゑられて七両二分の膳をくい 末三13

五両にせよ大金である。臨時収入で、早速明日質請けに出かけたこの亭主、どうもただの間男事件でなく、窮余の一策で女房となれあいの美人局(つつもたせ)らしい。こんなことをたびたびやると、

十五両めになれ合いと評判がつき 八一・36  
となるところだ。

高須||なれあいの美人局とまでつっこまず、ふとした女房の間違いを発見して思わ

ずも五両とり、その翌日急いで質出しをしただけでよくはないか。柳雨翁は「間男を見つけたので、女房のものを質請けして実家へ帰した」と解き三面子先生に「そうではない美人局だ」といわれているが……。

前田||「あす質をうけ」からは美人局を感じ。計画的であるが、さり気なく詠んでいる。

岡崎||美人局よりも、思わぬ臨時収入で質請けできた。しかしその収入はたまたまつかまえた間男の内済料——と考えるほうが柳味がある。

清||美人局であるか否かで意見がわかれているが、高須・岡崎両説のように臨時収入説をとる。美人局のように計画的に得る収入であれば、そしてまたたびたび行なわれるものであれば質屋の世話になる必要はあるまい。また悪銭身につかずの例のように美人局で得た五両ならば、多分遊びに浪費してしまうだろう。なお間男の首代としての、五両と七両二分については、藤井氏は貨幣価値の下落からとされているが「勘忍五両」という俚諺から五両になったとも考えられるし、また実説はないようである。丸||前田説賛。間男内済料については岡田先生の「未詳」に詳しい。

岡田||美人局かどうかは決定しにくい。とにかく質屋通いをしている生活者のあいだのスカンダル。

# 風流雪女

東 野 大 八

三月号に雪の話をしたら一三夫さんから文句が出そうである。しかし、これを書いているときは、二十センチもの雪景気なのだから仕方がない。

戦後、万事アメリカ風のころおい、サマータイムというのがあった。つまり夏時間というのが採用されたときのこと、たしか、四月ごろからだだったと記憶する。往時、今治に住んでいたが、四月に大雪が降ったことがあった。長野文庫さんだったか、サマータイムに雪が降り、という句を作られたのがウロ覚えの底にある。

さて、雪―私はこの白いものが好きである。小山内薫の名戯曲「息子」の舞台で、火の番小屋の親父が「イヤなもの落ちてきやがった」というセリフをいう。老齡の火の番にとつて、雪こそ難儀で、これほどイヤなものには他にあるまい。その人間の肌合いが、遺憾なくこの一語によく盛られている。ハルピンのサポールをピンク色に染めた雪

の華麗な朝。リン烈な寒氣に、路上でかつお節みたいにカンカチになった奉天の凍て鯉。スナガリーの果ての富錦で、膝まで雪に埋もれながら、コモ包みの三味線を頭にのせたモンベ芸妓。トロイカの鈴が胡同に木魂した死の果てのようなマジヤコウの蒼い夜。

だが、北京の初雪は、丹塗の牌樓をかすめ乾いた羽毛のように、宙天に舞うだけ。一片は蜂児。二片は鵝毛。三片は贅三。四片は聚四。五片は梅花。六片は六出。中国人は六出から陰の氣が凝ったものとしている。易では六が陰の数の代表である。しかし、この雪も立春を過ぎると梅花の形容にとつてかわる。陰転じてそれは陽のすがたなのである。梅は五片から形容をすてて、はじめて主体性を確立するのである。

雪はかぶさり溶ける。雪はセックスか。小泉八雲の名作「怪談」に、雪女の話がある。武蔵国の片田舎に、茂作と巳之吉の二人の木こりがいた。ある冬の夕方、猛風雪に襲

われた二人は、さる小屋に逃げ込んだ。火の氣一つない吹雪の底の小屋で、二人はいつか氣を失いはじめたが、若い巳之吉がふと気づくと、一人の女が顔の上にあった。つまり、女は彼の上にかかみ込んで、彼の顔をじっとみつめていた。その女の眼は怖いけれど、彼は女を大層美しいと思った。女はいう。

「私は、ほかの方のようにあなたを扱おうとは思いません。あなたは本当にキレイな方だから、あなたをどうもしますまい。あなたは今夜のことを誰にも話してはいけません。たとえ親身のお母さんにでもお話をなさると、私には直とそれが知れますから、その時にはあなたを殺してしましますよ、このことはきつと覚えていらつしやい」

女が離れると身体が自由になった。しかし女はどこにもいなかった。巳之吉は甦ったが、相棒の茂作は、この夜、凍え死んだ。雪女の白く光る呼吸を吹きつけられたためだ。それから長い歳月ののち、巳之吉は美しい旅の女と知りあい、世帯を持った。女はお雪といった。やがて、二人の間に十人の子が生まれたが、お雪は少しも年をとらず、初めにあったときのままに美しい。

ある夜、ぬいものをしていいるお雪の横顔を見て、思わずむかしの、凍死しかけた小屋の夜のことを思い出した。そして、ついにその夜の女のことを口走った。お雪はがばと起き上り、怖い顔で言った。

「その夜の女は私です。あなたはついに口にしてはならないことを言った。約束通り私

はあなたを殺したい。ですが、子供が可愛想ですからどうすることもできません」

そういう声が風のように微かに細ったと思うと、お雪は屋根裏へ出る白い煙とともに消え失せてしまい、二度とその姿をみせなかつた。

この八雲の作は、日本の雪女ではない。ドイツの人魚の伝説から転化された説話だという人が多い。しかし、謡曲「雪女」に在原業平が、片野の雪女と契りを交す説話があり、八雲はこれをアレンジしたのかも知れない。

へいかにせむ、片野のみの狩衣  
濡れぬ宿かす人しなれば

業平は、その片野の美女を都へ伴い帰ったが、くる春に、しばめる花のその如く、匂いも失せ、そのあでやかさはかげろうのように影さながらに消えうせてしまった。

謡曲「雪鬼」には「本来悪心の鬼にあらず年ふる雪の凝り固つて、他生の人体となる、その姿は女なり」とある。

—ありといえど見ぬは貞女か雪女（続五元集）

私の近くの飛騨では、雪女は一つ目一本足の雪入道の如しといひ、伊予では子供を呪う雪婆になっている。だが、雪国の東北では、雪女もいろいろがある。いわば八雲流である。

続五元集の右のうたは、どうやら北の雪国らしい。すなわち、秋田地方では、眼鼻だちも妖艶な女をみた男は、たちまち魅せられて淫されてのち殺される。磐城地方の雪女は、い

しょう。越後の雪女は男に抱きつき、会津地方はうぶめの姿であられ、遊んだあと子供なみの雪を背負わせ、深雪の底に埋めるといふ。

宗祇が、越後で見たという雪女は、背の高さ一丈ばかり、顔より肌がすき通るばかりに白く、白い単衣を着ていた。年のころ二十歳あまり、髪も真白にそたる歩み、はて如何なるものやと、見届けんうち、姿は消え失せたという。夜があけて土地の人に訊くと、それは雪の精霊、雪女、やうも無事にいられた—といわれた由。その雪女のいた場所が、ヤブの中だったので、竹の積雪がさまたまの現象から、そのようにみえたのだらう。謡曲「雪女」も竹ヤブだし、鳥山石燕の「百鬼夜行」の雪女もヤブが出てくる。このように考えると、雪にはもうい竹の性が、雪女の原型のように私は思うのである。飛騨の雪女の本足などその好例で、私も乗鞍の雪の日、樹氷けんらんたる中に、異形白相のヤブの雪に、自然のオブジェの粋をみたことで、今思えば、雪女の羅刹国の図とも眺め返すもムリなところは少しもない。

雪女から、話はまた中国へ戻りたい。

「雪の降るまちに、思い出だけが通りすぎていく……」

というこのうたは、私の大好きなメロディであるわけだが、このうたの底には、雪のハルピンの灯がまたたく。ラーヤやニーナと、サモワールを囲んでウオッカのコップをとりあい、うたうは、ステンカラージンや、プー

シキンの童話、そしてバイコフのタイガーやシモノフのエロだんぎである。

しかし、ハルピンを南下し、瀋陽の黒々とした城壁におよぶと、「水滸伝」の林冲が出てくる。巻の十「林教頭、風雪の山神庙」に臨江仙の豪快な大陸の豪雪の詞が出現する。

「宇宙の楼台すべておしつぶされ、大ぞらに漂う絮（わた）よ、飛べる綿。三千世界に玉の相い連なる、氷は交る河北岸。玉竜の鱗甲舞いて江も海も平らかにおし埋りぬ」

冤罪で顔に青刺され、倉州に流された豪傑林冲が、酒をやり首にくくりつけ、その豪雪の雪女とてもはや三舎を避けて影だになし。

よし、私輩も湯豆腐にて、今夜は独り酒をくむことにするか、雪女ならで、雪婆の老妻のしやくでな。

★「朝日ジャーナル」2月19日号に筆者は「失った片腕の知覚に似て」を執筆された。

黄銅六角ボルトナット  
及び特殊換物全般

合資会社  
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地  
TEL 06 3452-114  
夜間 06 4400 八

「旅人」以後の

# 麻生路郎作品

— 7 —

三十一年十月号

女が下車おりしたので岩波文庫読む

台風が外れただけでも人間はばかんとす

ボナンザグラムへ軽蔑の眼をおくる

逢曳バックへ背景も秋になっていた

敷布一枚の上に太陽族の如く

栗氏嚴父の計を悼む

秋の草 風すぎゆきて君は亡し

池田正三氏二科会友に推される

檜重もいた会友に君もなり

(婦人友の会一周年記念大会二句)

魂は抜けてあかつき近き三昧

爪弾きを聞いているのが金詰り

(八月本社句会)

通り抜けの寺にうれしい普茶料理

三十一年十一月号

(十月本社句会一句)

新任のくせに初手からよく休み

(杏林川柳会句会一句)

酔うても習った唄は座りかえ

(南海川柳会句会)

まとまらぬ話へ番茶ばかりかえ

(・出直す必要・内容―各作家は苦慮して右し左  
ししているのだから、ズバ抜けて巧い句や特に異  
色のある作品を発表している作家は見あたらない…)

三十一年十二月号

(十一月本社句会三句)

交渉もここまで来れば折れるだけ

交渉に怒って帰ったとは言わず

(山陰川柳大会二句)

力つきたか妻君の言うがまま

馬鹿力まず母親をあきれさせ

三十二年一月号

策多くまた大臣になりそこね

首相からの招電にちとうろたえる



麻雀をしているうちに恩赦とは

茶羽織にあの頃の貸 忘れられ

ライバルにはおっちょこちよいだった

薄墨の人生らしく旅に病む

寮の旅したとは云わず土産呉れ

瑞川医博令息の結婚を祝して

今日からは複数でするうけこたえ

南水翁の句碑除幕式にて

句碑なつて大阪市史を飾る君

(毎日新聞・春の川柳句帳)

佳かったな明治の新春の二重橋

内閣が変りや君まで大臣か

三カ日をエプロンでいる老夫入

多数決もう筋道は通さない

一万円札出たのかときくくらしなり

(本社十二月句会)

恐縮をして禿げたのをつるりなで

(大阪通信病院川柳会句会)

新築へあるじの戯画とやらも掛け

三十二年二月号

君でなくてはと云う人によるならで

風邪ひいて学者いよいよジジむさし  
一筆たのめば鳩居堂の墨

神武以来がどうしたと云いがかり

もう炭坑節でもあろまいが唄わされ

苦沙弥先生そっくりという父となり

持って帰ったのは大阪弁だけや

10月払ですよと先手打つ

又赤字殖やしに旅行へ行つて来た

(大阪通信病院川柳会句会)

忘れては呉れぬ僅かな金を借り

三十二年三月号

小住宅の設計二人は若かった

小住宅の設計雲と住む家か

あかちゃけた畳の如く生きている

文化勲章人間いやになる頃に

西崎緑さん逝く

和服をすすめたのが最後の思い出か

(大阪通信病院川柳会句会)

ほろ酔いであつたばかりに詰将棋

(・句集「私達」選る句のかずかず・内容―柳界  
の金字塔として永遠に新しいいぶきを放ってくれるこ  
とを祈るのみである……)

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

川村好郎

嗚呼釈白柳様

お手紙を束ね悲しい灯を点し

出原敬一

二月号川柳塔欄に清水白柳氏の急逝を悼む句が各頁に必ずあり、十七句を数え、前書きは無いが、追悼句らしきものを他にもあり、白柳氏が如何に柳界に活躍され、多くの人に敬慕されたか。今更その足跡の偉大さを感じ得させられた。その中でこの句は白柳氏の後進に対する愛情とそれを慕う敬愛がよく詠まれ、単に死を悼む誰にも通ずる句から抜き出ていることに思わず涙を押えたのである。

光り欲しめて妻病む間だけ

堀江正朗

奥さんの芳子さんが病臥にあるお知らせ受

けた矢先にこの句を拝見し、胸を射られる思いがした。実感の句程人の心を打つものはない。「手ぐりにやっとなじんだ洗濯機」と共にこの作家でなければ詠めない句である。芳子さんの御全快を祈って止まない。

新槍山館

捨てに行く手間を省いて置いて出る

河原みのる

うまい。と思わず口に出る句である。現代世相を巧にとらえ、笑いが止らぬ中に置いて出られた老父母の哀愁をふと感じさせる。

曲線も大事に引いて明日がある

小野克枝

直線ばかり引ける人生でない。曲線も又尊いコマである。具体的に詠んではないが、それがかえって深味を与え、今多忙な家庭と職業とたたかっている作者の気持がよく出ている佳句である。

乗ってきた老婆に席が二つ空き

増田次章

老人に席を譲る、譲られる句が奇しくもあと二句あったが、ただそれだけではもはや詠み古されていると思われるのも仕方ない。この句はその凡作になるものを突き破って、ほ

ほえまじいかくありたい句にまとめたところが巧である。類句恐るるに足らず、そこからもう一步掘り下げることが大切である。

つけまつ毛涙を何とうけとめる

高橋千万子

男ならあの顔でつけまつ毛などしてと一笑に終ってしまうのであるが、女性であるこの作者は流石によみが深い。つけまつ毛一つにもこれ程の見方がある感じ方がある。人生のすべてにもっと深く鋭く見つめるべきであると感じた。

子に任す炊事の音が気にかかり

岩田ひさお

これだから親子の断絶、人間関係のいざこざが絶えない。一家庭の小さい出来ごとを詠んだ、何でもない見逃がし易い句であるが、味えは捨てがたい教えられる句である。難句や技巧に勝った句で案外中味の平凡なものより私はこんな句に魅かれるのである。

西尾 栗著

「水鶏笛」

後藤 梅志著

「秀句鑑賞と梅志句集」

送料共六〇〇円

送料共 五五〇円

近作柳樽

## 秀句鑑賞

—前月号から—

### 若本多久志

#### 鏡の曇り拭いて女にかえる夜

河野君子

鏡の曇りであり、心のくもりでもあらう、一日の生活を反省して、厳しく自己を見つめる尊さを感じる。

#### 喪があげて子のない顔は石に似る

村松酔歩

愛児を失った親の悲しみは、その境地にたつた者でなければわからない。能面のように無表情な、虚脱した顔が眼前に浮んでくる。

#### 締切りのある人生と知るも老い

阪上十止庵

生老病死のことわりは身に泌みて悟っていても、何かの折りにふと、老を意識することはわびしいものである。

然し、「身は千年のかまえ、命はただ今」と淡々とした老境に夢をもって生きる人生もあることを。

#### 鉄なにを病む瘡ぶたのこと錆で

三宅不朽

この作家の個性を最大級に表現し得た鋭い句として讃辞を呈したい。

#### 祝電の一つ新婦の胸を打ち

谷森和風

ドラマチックな、女の宿命が秘められているような句である。

新婦に「永遠の幸福を祈った」祝電の主は果して誰？

#### 揉めている内に次の子身籠った

原田輝親

館直志作の脚本にでも出てくるような、悲劇の中にユーモアを織りなす世相の一面がよく詠まれている。ただ惜しむらくは、やや推敲不足。

#### 親しさは窓から結構用がたり

藤田軒太楼

日常、平凡な生活の中に見つけた句想を、調子よくまとめた手法に敬服。

#### 洗濯の白をかかえて幸福感

福富隆子

愛情と洗濯に女の生き甲斐を求めるのは、どこの国の女性にも共通した心理であり、真っ白にさえ乾いた洗濯ものを取り入れる時の、無上な幸福感は女でなければわからないのではないか。

#### 誘われた悔終電にぶら下がり

里小路

「こんな面白いものはない」という誘いに、うっかり乗って、行ってみたものの、期待は大きく裏切られて、帰途の電車にゆられ乍ら自己嫌悪感をかみしめている——そんな表現がリアルに詠まれている。

#### 下を見て暮らすと不憫な妻が言う

高野宵草

一読平凡な句だが、人生の奥深く、夫婦愛の真情をヒシヒシと感じさせる句である。（紙面の都合で鑑賞を割愛した秀句を左記します。）

#### 金策に行くにも男ヒゲを剃り

洋々

#### 一日のうさをおでん屋受けて立ち

孜孝

#### 雑布のかわいて愛の破局くる

十郎

#### セールスは遅し名刺の裏表

秀峰

#### ためらわず真紅に炎えて生きんとす

文子

#### 生存のはげしさ心に墨をぬる

弥栄子

#### ガムに似た永くは味の無い男

生仏

川柳五十三次 (六)

富士野鞍馬

6 藤沢

藤沢の宿は、戸塚から一里三十町（七・二キロ）ここにも遊女が居た。

藤沢はすこしおとりて口惜しき（武七4）

こわい者なし藤沢へ出ると買い（一四15）

今照手だと藤沢でくらい込み（末三10）

照手姫は藤沢の遊女であつたという伝説がある。

藤沢で拔身の分は右へきれ（拾三21）

藤沢の女郎拔身の客をとり（安八義6）

さんげさんげ藤沢で遊びました（一九11）

「拔身」は大山詣りの納太刀をいい、藤沢から右へ曲つて、伊勢原を経て大山へ参るの  
で、大ていの若者はこの宿で遊んだようであ  
る。

とめ女石尊時分けいきあげ（拾八20）

藤沢の下卑一ト盛り値を上げる

東水（二八41）

その女郎の値段も、普通は四、五百文であるのが、大山詣の時（盆前後）には、二朱から七百文に上つたそうである。

藤沢の悪留め今日は開山忌

町守（二六三31）

この開山忌は、遊行寺の開山、一遍上人の忌日、八月二十三日で、この日も賑わつた。

遊行寺は、藤沢市内に在り、時宗藤沢山清浄光寺といひ、建治二年（一二七六）一遍上人の草創である。

上人は愛媛県の人で、俗名を別府通秀といひ、七才で天台宗を学び、建治元年（一二七五）熊野に参籠して念仏安心を究め、その翌年、この清浄光寺を開き、融通念仏を唱えて、日本中を遊行し、六十万人決定往生のお

札を庶民に配り、正応二年（一二八九）兵庫の真光寺で、五十一才が最後であつた。後、円照大師の称号がおくられ、入寂の日、八月二十三日には、全国時宗の寺々で遊行忌（一遍忌）が行なわれる。

衆生済度に国々を遊行する

升丸（二〇六14）

わが寺になると遊行は追出され（二35）

飯たきの主を知らぬ遊行寺 柳雨（八九28）

この寺の住職になると、諸国遊行に出かけるので、住職を遊行上人と呼び、寺を遊行寺といひ、宗派を遊行派という。そこで寺の飯炊男は住職を見たことがない。

藤沢の鼠は諸国遊行なり 猿声（七三39）

藤沢の鼠大黒きらひなり 可笑（四九23）

一遍上人行脚中、墨染の衣が鼠色になつてしまつたので、それから鼠色の法衣を用いるようになった。

欲面の張つたを遊行額で見（拾三23）

そば切に遊行の供の口が過ぎ（拾八30）

「願えば物欲何でも叶う」という寺法があつた。

藤沢の蓮華末期の水で咲き 竹子（六九6）

藤沢の蓮華時候にかかはらず 矢正（四二2）

名僧が蓮華一りん咲せたり 曉賢（八六7）

藤沢の蓮は時候の外に咲き

竹子（三六34）

廻国の時には、上人も從僧も、木製の蓮花の蕾を手にしていたが、上人遷化の時に、その蕾が開いたという伝説がある。しかし「海録」には

「そのかみ藤沢山にて不時に蓮の花咲きたることあり。その頃いぶかしみめでしに、後に遊行の遷化つげ来れり。思い合するに

花咲く頃なりとぞ。これらの事を誤り伝へしにやといへり。」とある。

一遍上人弁慶かたわけ 帆布(二〇六八)  
一片上人仏前へ御来光 柳交(二七二八)  
などの戯作もある。

また藤沢は、江の島への途としても重要な

岐点であった。そのためにも相当賑わったものである。広重の絵には、江の島弁財天への鳥居と遊行寺の森とが描かれてある。

あまり聞かぬ藤沢に鳥居也 雨澤(宮四一四)  
とそれも川柳に詠まれてある。

阿万万的・松川杜的共著

## 句集「的」の書評

戸田古方

「柳俳の違いは季節のあるなしだよ」と無造作にいう人の言葉を聞いたことがある。俳句は自然的、川柳は人生的だともいうが、どれも群盲探象である。柳俳の区別が不用になる日がくるかもしれない。

阿万万的・松川杜的の句はこの希望をもたせて呉れる。

両氏の句集「的」ができた。先輩正本水客氏は序文「花欲然」に、「句の命は『的』の中で何時までも燃えつつける……オオヤマレンゲは満山の緑を圧して薄紅の花を目ざめるように燃えつつける……」と述べ、両氏の作品はそのオオヤマレンゲだと讀んでいる。

鉄道マンは旅がお好き。お三方とも、川柳

の輪と俳句の輪の輪違いの中にいられる。

この句集には、そうした句が数多く収められている。人間の句いは杜的氏に強く、自然により融け込んでいと見られるのは万万的といえるかもしれない。

鐘の音に紅葉の底はすでに暮れ  
山まつ赤峯の峯まで朝の色  
屋根みんな月の色です島ふける  
よく見れば雑草の中にもあったボス  
夕立へ蟻には蟻のかくれ場所  
お二人はカメラマンでもある  
カメラの位置変へればつつじの花が落ち

ファインダー一杯石仏の位置定まらず  
お二人は足で作句されている。

便所の隅にちびた箒があるお寺  
車窓から見ればたくさんある緑  
お二人は細い神経でシャッター・チャンス  
を逃さない。

キラリ光って遙かに高速バス曲る  
石庭に住みつきとかけの色も石の色

水草の切れ目切れ目に城の影 杜

お二人は深い愛情をもって、自然に抱かれていられる。

初夏の磯ガム吐き出してする呼吸  
どっこいしょアラアラ土筆の上だった 万

雨の夜に如何におわすか野の仏  
柳兄万的氏に歩調を合す杜的氏。 杜

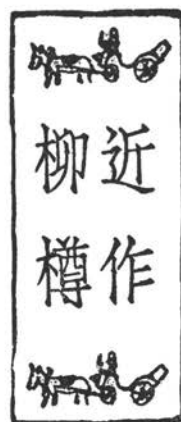
灯籠の構図へ雪を置いてみる  
デスク・マン杜的氏には人間川柳、ホーム川柳が目立つ。 杜

割箸も二三本置いとく事務机  
職場の孤児になりにたくない牌をもち 杜

式服を脱いで思い切り足を伸す  
かつぎ屋とかつぎ屋とにある礼儀  
説き伏せてみても所詮は吾が子なり 万

エンジンアであり、多才の万万的氏の「科学のうた」、往年「川柳二千六百年史」「川柳世界史」「川柳につばん」を書いた私なら「川柳科学」にでもする所だろう。啓蒙も兼ねて珍らしく、嬉しく読ませていただく。

四六・二・五



北川春巢選

松江市 内 藤 喜 夫

幸せと云う線上に妻が居り

マイホーム主義なり平で甘んじる

柴犬を飼って親子の対話もつ

ためらいもなく倅せと女云う

再婚の噂をよそにパンタロン

大阪市 小 出 智 子

読みさしの本を開くも松の内

四五年も前より派手な柄を選び

名曲を聞く情熱がまだ残り

叩いた母のめじめさをまだ知らず

うれし涙に苦勞を流す母

守口市 野 呂 杜 月

初笑いいつ出来るやら物価高

お年玉集金に来る寝正月

内緒話聞こえるような白い息

南天の赤さに老の血もたぎり

着るも脱ぐも母のお世話になる晴着

尼崎市 中 谷 利 美

愚痴こぼす税も税金納めてず

けむたいと思う心が既に負け

薬より同じ効くなら玉子酒

ほめられた礼 抱いた子に芸をさせ

餅代というボーナスの社に勤め

和歌山市 垂 井 千 寿 子

奇跡など信ぜず今日も主婦であり

こらしめの為の家出は二日だけ

マンションの影のボロ家に大家住み

兄嫁も上手になった実家訛り

障子張り夫と心通う時

鳥取県 鈴 木 村 飄 子

喪服着て来たを村中みんな知り

髻を剃る横で女房髪を染め

さよならは淋しい言葉笑うても  
この蟹を一枚ほどで建てた家

松江市 村 松 醉 歩

母子寮や童話の父が喋りだす

自殺考えずガンと闘えり

遺児として山に登らぬ旗を振る

山菜と地酒男に生れたり

八尾市 高 杉 千 歩

息子二十才

友と祝う息子を嬉しくも淋しくも

理論から愛へニキビのあとたえず

成人へ母の世代も聞かせとき

ギター卒業ステレオに悩まされ

大和郡山市 森 田 カズエ

年の暮義士外伝が泣かせてる

終りまで観て低俗とケチをつけ

ナツメロのテレビへ母の声が和し

オルゴールの音爽かにバキウム車

松原市 玉 置 迷 朗

常識がつまらぬとこで妥協させ

日溜りで過去に生きてる祖母の皺

甘えられ頼られ妻の白いもの

金婚式まだ諍をする若さ

今治市 渡 辺 南 奉

さようなら言えず尾灯が冴えわたり

丁重な語尾へ疲れを意識する

花活けただけで女の幸に酔い

人間の非力へドロへ腕を組む

広島県 松 村 喜よし

出世する名前を漫画ばかり読み

片手間の習字を代書頼まれる

図書館の空気欠伸の粕も浮き

公害の捨てるに惜しい米の艶

大阪市 西 本 保 夫

週刊誌だけの知識で平社員

学級委員父さんは平社員

長男を意識しすぎた平社員

コンピューターから遠ざかる平社員

鳥取県 両 川 洋 々

熱の子へ足音までも気をつかい

十大ニュースより

逆転をしたのも八百長かと思ひ

腹なんか切れぬが三島ファンなり

妻さえも騙ませぬ嘘をつくのなり

大阪市 小 谷 葉 子

けっきよくは一人となって廻り道

片道の愛はソナタに乗って行く

想い出の歩巾となつて風薫る

倅せな女の瞳振りむかず

大阪市 河野君子

イメージチェンジ鏡もかつらとは知らず

祖母の味引継ぐ雑煮を客が賞め

家族麻雀カモにもなつて和を保つ

大阪市 江城修史

人生の起伏の一つ除夜を聞く

人生を信じ拍手打つ男

あかぎれの指に暮しの詩がある

竹原市 三宅不朽

ひとり来てひとりは厳し流の音

亡父の顔ありあり棟に我が家建つ

灯明にしかと身を置く我が家建つ

八尾市 飯田一治

妬く気にもなつて二人へ今日わ

珠数使う方はどっちか俺と妻

なつかしい母校の話で若返り

大東市 荒木鶴翠

寒風に鎌が鳴つてゐる野良仕事

寒風にゴーゴーおどるネギ坊主

三カ日煮しめの梯子してまわり

竹原市 簗田浄美

一言を強め実感隠せない

夜光虫みつめ二人だけの海

あなただと判る足音ふりかえる

島根県 堀江芳子

食べ盛り過ぎた息子の味気なさ

寝ていての指図遠慮をしながらも

どやどやと来て疲れさす見舞客

大阪市 柳原静香

音の無い世となりてすでに子は二十才

夫のベレーを目印にして暮の街

受験にはふれず初春の膳につく

八尾市 高杉力

押し花に名残り留めた夏の恋

それでいいのか男ピエロに問うてみる

ノックした途端恋が転げ落ちた

鳥取県 林隆子

好きですと今日は言いたい酒を飲み

乱れてる心ミシンにのぞかれる

親のないひがみ泣かない子に育ち

河内長野市 井上喜醉

整理するアルバム妻の若さ見る

戎さん残った年玉みな使い



二次会の方が美人がよく揃い

岡山県 山田 止水

大声に馴れ叱言を聞き流し

大阪府 河原林 比呂路

追憶の人旅空の似姿よ

拒絶していながら女はコンパクト

死に急ぐこともあるまい十二月

恐妻家陰弁慶という集い

和歌山県 増田 めぐみ

エプロンのままお茶の味十二月

堺市 栗本 藤持

古暦心の傷を増して去る

倦怠期背中合せて終着駅

落着いて歩いてみても年の暮

母となるわが娘の色香に一寸惚れ

和歌山県 ふきあげ 虎城

漫画本見るだけで趣味は読書

編み棒に意地がからんでいる夜なべ

大阪市 白石 良圭

つつましく女は秋を歌い上げ

元旦も忘れず時計のネジを巻き

ポケットの硬貨に父としての詩

タクシーの拾えるところまで歩かされ

新宮市 大矢 十郎

長髪的男もまじる美容室

泣き声へ乳房よ愛のさるぐつわ

竹原市 楠 美佐雄

着こなしのセンスへ負けを意識する

冷戦の隙間へ師走のしかかり

美しい嘘かも朝の雪化粧

春の海寿ぐように白く風ぎ

愛媛県 小笠原 仲美

氷結のままの仮面も片親子

子が出世もうこせこせと歩かない

守口市 樋口 一峯

叱り過ぎたと悔いてるに流行歌

魚住まぬ水で作った米恐わし

攻勢に出るかライバル眼が光る

お年寄りへせめて薪炊く風呂残す

広島市 槇田 英詩

新築へ老いと若さにビジョンの差

錦かざる夢はこぶしを握りしめ

大阪市 斎藤 三十四

一泊の代打を嫁に頼んで出

寒鮒へ懷妒ずらして昼にする

ベランダで恵方拜んで寝正月

大阪市 本間満津子

価を聞いてうなつて笑うて帰つて来

遠慮なしオナラもアクビも老夫婦

寝正月胃袋ばかり働らかせ

大阪市 松岡茶々坊

数の子のつく正月は景気良し

初便り元氣な姿筆に見せ

書初めをパパ手伝つて〇もらい

高槻市 山田スミ子

善悪は別今日一日をする反省

新春の早や春斗が飛ぶニュース

肥るからいかんのやーとお医者さん

広島県 南条露声

仏壇の花を枯らして低気圧

破算したように娘が戻つて来

シシ鍋をたべてフアイトへ見がまえる

富田林市 木村弥栄子

昼の暗こんな政治の底に生き

地球より重い命が時価相場

それからは他人が心に住みついて

島根県 志賀美栄

道化師の顔で落葉の自尊心

はでに泣く孫のおもりは一万歩

水鏡素顔は悲しく泣いていた

東大阪市 宮西弥生

生活のリズム狂わすすきま風

炎えてなお女仮面はずさない

守口市 岸本豊平次

傷口を舐める舌にも唾がきれ

振袖を着せるモンペを忘れた日

岡山県 武内雅堂

エプロンをつけると姑の老婆心

大膽にふるまう妻は演奏者

小松市 村井城南

下向きの生活を見ない妻の愚痴

ヘソ曲げるつもりじゃないが酒が言い

竹原市 脇本政己

棄てられた家に深々雪積る

風邪引きの妻香水を匂わせる

七尾市 松高秀峰

生活の知恵で不況を上手く生き

鍋料理囲む平和な日が続き

富田林市 板尾凡吉

四十の坂をエンジンふかしすぎ  
山道にPPMが列つくる

島根県 大森孝華

話したきことみな春へ廻しとき

小雪舞う除夜の参道春の音

鳥取県 林露杖

もう後がない机のキズを撫でてみる

信じているから死んでいけます手を握り

大阪府 藤田頂留子

年一つ取って明るい色を着る

十円であれもこれもと拝んで来

大洲市 堀内曉風

点滴をじつと視つめて死の恐怖

献盃へ片手拝みに下戸辞退

泉佐野市 大工静子

姑の去るを待ちけんかのつづき

正月の留守番たべるのも忘れ

大阪府 阪上十止庵

人生の雑種で首輪だけはつけ

カラーTV初回は妻と子が払い

仙台市 川村映輝

いじわるがいじわるされて口惜しがり

酒タバコ身に染みている成人式

羽咋市 三宅ろ亭  
露のとうふとわが過去をふり返えり  
卒業生へ定退訓話は熱をこめ

鳥取県 近藤秋星

精神は依然雅いままに老い

悟りなどとてもと座禅解き

島根県 榑原秀子

盛り上げてよろこび分つ大ジョッキ

見すかしてお手ごろですとすすめられ

新潟県 高野不二

平社員名刺一箱まだ残り

中古でもキーホルダーを派手に下げ

竹原市 楠貞子

近づけば近づいて来る愛と知る

愛情がくずれる如し枯葉散る

岡山県 武元柳子

ことさらに鯉けむらせ不和の夜

気休めと知りつつ心ほぐれてき

羽曳野市 大峠可動

宿命を避ける命の予備がない

人波へ孤独祭りの顔で行く

和歌山県 小川佐知子

二枚目でないけど一生添える人

美しき人美しく座をしめる

今治市 薦

本 昌 道

経営の良さの中なる妻上位

神戸市 横

山 孜 孝

日々多忙よろめく隙のない生活

羽曳野市 麻

野 幽 立

薬飲むような顔して妻の屠蘇

寒稽古

木 朋 子

風よ吹け寒くともよいスモッグへ

八代市 船

木 史 朗

断層を十六時から悟り

ちっばけな幸せ春風髪乱す

大阪市 鈴

口数がへって東京から帰り

竹原市 生

信 笑 子

早耳の耳を自慢にして達者

宿毛市 山

本 窓 花

どちらから見ても十五夜すぎがなし

女手で生きて女を失なわず

田 竹 馬

手鏡へおはよう朝が明けるなり

新宮市 小

山 峻

円う生きよう己が余生に言い聞かせ

米子市 増

井 露 芳

シシ追いは賀状も欠礼してしまい

縁談の使者幸運の使者に見え

大阪市 平

三つ指の女キレイな声を出し

兵庫県 高

橋 近 江

漢方の気薬に頼る気の弱さ

寝屋川市 福

富 隆

税金は矢っ張り取る気へ取られる気

マキシ一の裾の汚れを意識せず

富 隆

内職が今や本職指細り

東大阪市 落

合 思 月

すり硝子音の世界に切りかえる

島根県 東

原 福 子

妥協することを知らない子に育ち

手相を信じ応募原稿出しただけ

富 隆

心ないやから善意をふみにじり

京都市 山

本 峠

我を張ったあとにポツカリ穴があき

島根県 東

原 福 子

キャリアが何気なく出るばちの牙え

京都府 矢野 晴光

サンタなど居ないと子供夢がない

城崎へ蟹のまってる慰安会

松原市 守屋 万竿

賽銭が飛び交う下で頭垂れ

寒波すぐ新幹線を痛めつけ

大阪市 堀口 欣一

日本一の長者の秘訣やはりケチ

正月の晴着で白い杖を持ち

貝塚市 行天 千代

結納済んで俄然娘の欲深さ

家柄が何です息子を尻に敷き

和歌山市 樫村 ふみよ

丹前の衿だけかえて老晴着

割かんで飲まれいつでも送り役

奈良県 岩井 本蔭 棒

嵩だかいパパと云われて十二貫

特急を停める団地のたくましさ

高知市 野崎 寛

グレンミラー世界に通う音を出し

お隣のミニが気になるグレンミラー

輪島市 山元 無限

ポーナスは勤務意欲のにぶる額

あぐらで書いた書初め正座して眺め

鳥取市 山形 春海

お隣りも米寿が守る過疎の村

ああしんどご用始めの帯を解く

島根県 安達 潮音

先き死ねばお困りでしょうと妻つよし

つきまとう過去新生の壁となり

大阪市 花田 繁子

目に耳に縁起縁起のお正月

聞き上手しゃべった方を喜ばせ

今治市 大木 バット

女系家族の男一人でやわらかい

役員になって定款読み直し

今治市 真山 国彦

忘年会の通知女房に間引かれる

もう先が見えた断酒をご破算し

今治市 今井 松花

セロテープ貼ってやりたい紅い口

電気代高いでしょうと世辞を云い

今治市 古野 伶人

下請けを倒産させて高姿勢

新婚を見送る駅へベタル踏む

今治市 原 田 輝 親

冷戦の妻に欠伸をうつされる

沖繩事件

日本人間なりと云うただけ

大阪市 松 岡 進

振袖を着たミニ娘横すわり

胃の病氣今日まで知らぬ総入歯

大阪市 木 村 洵 水

大晦日隣は隣うちほうち

禁酒して男になったお正月

大阪市 鈴 木 生 仏

未亡人息子夫婦に一寸嫉け

パパの秘書未婚と知ってママはやけ

大阪市 広 畑 賛 平

酔うて出て子の風揚げにまじりこみ

タコ焼のうまい店孫が知って居り

大阪市 吉 野 志 津

飛鳥の風もてはやされて吹きぬける

公害をよけて伊勢路の年忘れ

奈良県 草 深 信 義

溜息はつくまい病氣に負けるから

道言のような日記を書き綴り

和歌山市 吉 野 富 子

四度目の亥男フアイトにたぎる朝

和歌山市 田 中 正 夫

ペンだこも消え停退の年賀状

大阪市 木 村 久 子

真行の額縁買って心地良し

大阪市 村 島 秀 村

公害も正月だけは青い空

河内長野市 森 本 黒 天 子

ゆく年に真っさらの下駄下ろしとき

島根県 錦 織 文 子

客に出す手は別に欲し過疎の妻

藤沢市 河 内 好 雄

この辺でええわと娘晴着買い

島根県 中 島 英 子

女世帯育つ愛児にはげまされ

大阪市 岡 本 まさひろ

どどのつまり女 女の性(さが)を見せ

今治市 伊 藤 一 郎

屠蘇機嫌今日仲人の強引さ

大阪市 今 井 隼 人

公害の雨と雪とが降る世代

▼前号訂正・36 P 19行目

球根に名を添え子らと春を待つ(小出智子)

# 近 詠

須坂市 高峰 柳 児

嬉しさは作品で来る年賀状  
子らみんな車 正月しに帰る

今治市 月 原 宵 明

華やかな前歴世渡り狂い勝ち  
初荷旗なびかせ不渡りの罫があり  
自由さき取りにして若さの浪費  
故郷へ背を向け汗の日に耐える

長崎の夜にマキシの似合いそう  
鐘撞いた余いんへ落葉誘われる  
矢印の通りに焼香廻される  
風邪癒るまでホステスのパンタロン

大洲市 米 沢 曉 明

和歌山市 秋 月 宏 方

長靴もやっぱり除けた水溜り  
早退の今夜斗争委員会  
ストープも三日休める注連を張り

押し売りのように初荷を持ち込まれ  
新鮮なことばの一つ春浅し  
プラカードごつい字でよし下手でよし  
排気ガス存分吸うて都市に生き

## 成人式に

高 驚 亜 鈍

成人式に出ない娘に誰がした  
初心の驚き初の親初の孫  
活かすべし主人ひとりのものならず  
活かすべし親子親縁棄てたばかり

(白黒記の反響)

棺にいて弔辞のつもりで聞くおもひ

台風一過鼠は覗き雀はしゃべる

ステッパばいステッパだうんを喫す  
ひたむきに狙う詩をすら見失う  
ぼろくそに云われっぱなしの安楽死  
仕舞だと何をぬかすか死んでも生きん

観る側にあり善意に充ちた仏さん  
宗右エ門町で振りまわしてる破れ傘  
宿癪玉ブラスチックには不発

義父という字が邪魔になる公と僕

二女の開店クラブを訪う

義父という字が邪魔になる公と僕



たのしさひろがる お買物

**阪急**



大阪梅田本店  
千里阪急・神戸支店  
東京大井店  
数寄屋橋阪急



若本多久志著

「親ころ・子心」

実費 二〇〇円 送料 六五円

「老いの坂」

実費 四五〇円 送料 七〇円

橋高 薫風著

「れもん」

送料共五百円

春の町去年の義理はもう忘れ  
柿どころ見事急行通過駅  
何が悲うおますと派手な扶助家庭

岐阜市 市川 鱈 魚

# みそぶたわれに似たり

東野 大八

人間は死ぬために生れてきたのであるからそれは覚悟の上とは申せ、やはり死は寂しいものである。

越し方一年、私の知己、友人の幾人かの計をきいたことだが、柳界では後藤梅志さんと清水白柳さんのお二人の死が、さまざまの意味合いから、私の心にこたえた。歳末も押し迫った大晦日の昼どき、雑沓無章をきわめた私の二階の書斎をとり片づけていると、梅志さんや、白柳さんからのお便りが幾つも、幾つも出てきたのである。どれもみな、私ごとの、その日、そのときの書きなぐりだけに、今となつては、哀切一しおである。

明の張岱の陶庵夢憶に、わが肖像に寄す主題し、つぎの詞がある。

功名が あだとなりぬ  
富貴が 夢のごとし  
忠臣か 痛からん  
スキクワか 重からん

著書二十年か ミソガメのフタの如し  
この人か 用ありや用なしや

みそがめの件は、晋の陸機が、両都の賦を作ろうと企てていまだ成らず、左思がそれを作っているときいて

「田舎者のくせに生意気な、もしできたらみそがめのフタにしてやる」といきまいたという。

私など、くだらぬことを八方にかきとばし路郎先生など、そのいくくりをムリをして一冊の本にして下さったけれど、今となつては読むにたえぬ。その後の雑文なども顧りみれば、潰れた豆一粒にもしかず、総じてそれはみそがめのフタの如しである。奈良のいかるが荘で開かれた大陸川柳同窓会にそれを口にしたら、白柳さんが

「まだフタになるだけよろしいがな、わてらみそにもならん句を仰山作って……」と、例の人懐っこい微笑であつた。

いま、その人の口裏を思うと、川柳に年季をかけた人ほど、味噌作りの協力者のような気がせぬでもない。雲霞のごとき川柳句よ、一体、お前たちはどこへ行く。

私の家の土蔵には、もう二年越しの大みそがめが四つある。うち三個は、近所の人の預りものだが、時折、気が向くとそれをかきまわしにいく。プーン、と鼻をつくみそだまりの臭い。厚型はすでに失せて、まるで泥土の如しであるが、いつも長柄の棒をひねくるたびに、「川柳みそ」「川柳みそ」と心につぶやくのがならわしである。そのあと、肥オケの底みたいなをのせておく。ずるずるの、いやにねばっこい厄介者が、すなはち、みそがめのフター私なのである。

陶庵のざんきが、そうした臭い一枚に表し得て妙というわけだが、よく、むかしの川柳古本には「山人」の号を付したのがあつた。

「山人」とは、世俗を厭うて山に隠れたいわば「隠士」を指しているのである。首陽山の伯夷、叔齊を、私は元祖と考えているが、明朝も末になると、山人も山をきらつて町にすみ、大官富豪の食客となる手あいが多かつた。当時は、妓女、盗賊とならんで、このエセ山人の多きことを数えて「明末三多」といわれた。

エセ山人も人間なので、元祖の伯夷と異りワラビを食つて生きていくわけにいかない。そのため、旅回りの山人となり、そこそこで山人ムードをひけらかして、酒食や旅費の無心をする。一名こいう連中のことを「打秋



風」という。

「陶庵夢憶」に打秋風の一席が載っている。

著者が六歳のとき、祖父雨若翁（張汝霖）につれられ、杭州にいったとき、明末文壇の大立物陳眉公（陳繼儒）にあった。この先生は鹿にまたがり、悠揚と現われたが

「お孫さんは対句が上手とのこと、この場でわしに試させて下さい」といって、傍らの茶店の、李白が鯨に乗って

いる絵を指さして

「太白鯨に乗り、采石江辺夜月をすくう」といったので、六歳の著者は

「眉公鹿に乗り、錢塘裏に秋風を打つと付けた。眉公大いに笑ひ、かつ喜び、貴孫は千秋の業（文学の道）にすすまれるよう、と祖父に説いたという。天下の大御所を「打秋風」にひっかけた六歳の頓智に、さすがの相手もグウの音もでない。ここが面白いわけだが、その神童も四十すぎればただの人で、みそぶたの嘆を残したままで世を去った。

明治、大正期の古い川柳人が、山人と号して、川柳に隠士を気負ったことは注目してよい。みそぶたと知ってか、首陽山の二老人を

気負つてのことか。

だが、私は山人のせんさくはおいて、柳人ならざる人に、よく説いていう。

「癖のない人とは交際すべきではない。そういう人には深い情がないからだ。キズのな

い人とは交際すべきではない、そういう人には真の気がないからだ」

これはいつの日にかの、明書の先達の言からするウケうりだが、たまにはそれに対して切りかえしもうける。

「そういう連中が川柳人に多いということかな」

「左様、川柳人はへそ曲りが多い。へその曲らぬ川柳人の句は人をうたない」

癖は疵（きず）だが、無くて「七癖」では曲り方は少なすぎる。現にイキな、いい女ほどひどいへそ曲りに惚れやすい。へそ曲りで貧乏しても、その人生はコクがある。

白柳さんは、職人氣質について本誌に書いていられたことがある。これは私との職人論で一致をみた結論である。これも受とっているわけだ。白柳さんは川柳職人をケイベツし、職人氣質を重視した。その通りである。同じ大工でも、「気質」のこもらぬ仕事は、もはや仕事とはいえない。左甚五郎とまではいなくても、気根のこもった、深い情と、真の気の打ち込みがそこにあるこそその、「仕事」となるのである。

竹工と漆工と銅工、窯工というのは、みな賤しい職人である。だが、王二の漆竹（嘉興）華雨の竹かこ（蘇州）張銅の銅、呉明官の窯（徽州）は、みな明代での不世出の名人として世に伝わっている。彼等はゼニや名によって仕事をしたのではない。すべてが甚五郎方式で、職を果たしたのである。

彭天錫の芝居は、旅回りの職人芸といわれたが、名代となるや、万金を積んでも気がのらぬとてこでも動かない。そうかと思うと、

名もない掛小屋で、十人相手の村の衆を相手に大熱演をやる。梶子野という笛の名人は、江左第一といわれる笛吹きだが、われながら妙境に達すると、「どうしよう、どうしよう」と自分の心に問いかけ、問いかけして吹いたという。どうしよう——というのは、この妙趣はほんのとき、束の間で消え失せるのである。とっておけないその音律への焦そうがそういうわけなのである。

川柳は記録性をもつ。しかるが故に、芝居や笛より始末がつけやすい。白柳さんはここを指摘してのことと思われる。だが、川柳人の私は、それ故にこれ句が作れなくなってしまう。しよせん、私はみそぶたの一枚という宿命にある——そう断じざるを得ないのである。可愛想な奴。

色紙短冊  
書画用品

大坂戎屋

丹 主月堂

を申セニ、セニ

# 白柳氏を悼む

## 市場没食子

白柳氏が急逝した。なんと悲しい、寂しいことだろう。

氏は柳界の苦勞人であり、少しオーバーかも知れないが、川柳界を泳ぎ廻った過去の持主でもある。それでいて詩川柳の本筋を真すぐに歩いた人でもある。長い柳交がボツンと切れたかと思うと、私は瞬時呆然となり仕事も手につかなかった。

昭和初期の大阪には、番傘、川柳雑誌、大阪の三柳誌の外に、三味線草というガリ版の柳誌があって、全国柳誌の裏面史や、人物評を掲げて、我々初心者に人気があった。鉄筆から刷りまで、一人でやっていた森鷗外氏の仕事に白柳氏が関係あったとか、タッチして見たとか聞いたことがある。後日氏にたずねて見たら「そんなことあるかい、俺は何にも知らんぞ……」とにべもなく否定したが、真偽の程は今も判らない。どの柳社にも籍をおかず、一匹狼の存在だった、もう知名の川柳人でもあった。

氏もまた根っからの川柳好きの一人であろう。自分の川柳を型造るため、自分の進む道に悩んでいたように、その間が氏の一匹狼時代だったと思う。でも彼の脳裡には早くから師と仰ぐ人は極めていたとも言える。「現在の柳界ではやっぱり路郎師の下に行く外に師と頼む人はない」と漏らしていた。果して幾ばくもなくして、川雑に名を出した。落付く処へ、落付いたとも言えよう。

川雑の句評会と一緒にあったある時、私等が色々と句評をしていたら、最後に氏は「僕は最新から、みんなの句評馴れしているのに感心している。この句にそう長々と喋ることが僕にはない。」と皮肉も混じえて言ったことがある、今も印象的で頭に残っている。

鳥ヶ辻川柳会（大阪通信病院）へも二、三度選に来てくれて短評やら、柳話をしてくれた感動さした。

東雲町時代の氏の宅へは、私が近くの玉造生れの関係で、本家を尋ねる時、ついでは

いって失礼だが時々寄せてもらったし、氏の弟さんの友帆氏も川柳人だったし、いまカムバックして、活躍してくれた、雀踊子君と共に、水車氏から譲られ、難儀していた私の今里支部に友情出席して助けてくれた。

川柳塔になってからの白柳氏は目覚ましいものがあり、懸命な努力は衆知の通りで、全く頭の下るものがあつた。顔を見合せたら、「遊びのつもりで句会に顔を出せよ」といつもいってくれた。「賀状にも昔の君に還ってくれ、みんなもそれをまっける」と書いてもくれた。老化退歩一途の私の友情である。

私を川柳界に引っぱってくれた、和田玄水氏も、川雑へ紹介してくれた緑雨（当時の橋本二柳子）も故人となった。先に鮎美、豆秋、梅里氏も幽明境を異にしてしまった。今また悲しい、川柳の巨幹の計に会い、人生の穴洞さをしみじみ感じている。氏の死は川柳界のために大きな損失であり、川柳塔のためにもまだまだ生きてもらいたかった。合掌

君の計へ春日遅々の句が浮ぶ  
又、又、又、柳の巨幹朽ち寂し

没食子

☆

白柳さんの句集は、刊行委員長西尾榮氏がその完成へ努力を傾け、菊沢小松園氏が友情のありつたけを注ぎ、八木摩太郎氏またその熱意を燃やして着々と進んでいる。

体裁やすべてのことは三氏合議の上で決まる。ご期待ください。



## 伊藤泉睦さんを偲ぶ

村 田 瓢 太

日、全快祝いを兼ねた吟行会を自宅で開くからということで、川柳部の会員はお宅を訪問して楽しい一日を過したことも今は思い出となった。あれから僅か四カ月足らずの今日幽明境を距てようとは誰が予想したであろうか。

まるで川柳部が生れたのは昭和三十一年十二月で、丁度満十五周年を迎えたばかりであるが退社、転勤、出向などによる異動で当時から会員は泉睦さんと私の二人だけとなっていた。泉睦さんとは句の表現やいろんな意味で作句の上では良きライバルであった。

好郎先生のおすすめで二人揃って当時の川維本社句会や大萬川柳などへも数度出かけたこともあるが、泉睦さんは人事部の要職にあり多忙なためいつか他の句会へ出かけられぬようになったが、後輩の指導や世話を実によく見られるのでその温厚な人柄にはみんなよく親しんでいた。

十日の告別式当日は寒中にも似合わぬ暖かなよいお天気であった。過ぐる日吟行会を催した部屋には祭壇が設けられ泉睦さんの温顔が最後のお別れをする会員の一人一人に呼び

かけておられるようで、万感胸に迫りせきあげて来る涙をとどめることが出来なかった。四十六才なお春秋に富む人生を閉じられたことは余りにも早く惜しみてもお余りあることである。どうか泉睦さんの霊よ安らかに眠って下さい。

なおお遺族は奥さん、長女(住友商事勤務)のほか今年大学受験の長男、高校へ進学の二女の四名、最近の作句の中から泉睦らしい句を選んだ。

からまれて課長寄附だけ置いて逃げもうロングはいて流行追うも秋寄り添うても傘の高さに気を使い

中元へ箱ばつかりの見栄がくる  
風呂敷へ紐足してまで怒つつみ  
妻の留守机の上のメモで喰べ  
二枚舌承知で女のつてくる

そんな国あったかと地図へ顔が寄り  
お見合の梅雨の晴れ間がまぶしすぎ  
聴診器無情に美女を這い廻り  
頭から叱りとばしても母は母  
賑やかな人でと通夜も飲ませる気

(写真は故伊藤泉睦氏)

泉睦さんが三度目の入院をされたのは、暮も押し迫った昨年の三十一日だったことは出勤の日初めて知った。そのうち一度お見舞にと思っていた矢先き、一月九日に亡くなられたとの報らせをうけて、余りの衝撃で仕事も手につかぬ有様だった。

第一回目の入院は三十八年十二月に阪大で胃の病を切り取られたが、退院後の回復も順調でこれならばと愁眉を開いたのだが、病魔は執拗にも更に第二回目の入院を余儀なくさせ、昨年八月腸の一部を切除された。この時の病状はかなり進んでいて「よくもってあと一年」ということを家族の方々にはひそかに報らされていたとのことをこれも亡くなられてから聞いた。

二回目の退院後残暑のきびしい九月の或る

昭和四十六年三月現在

# 川柳塔社同人

青木遊星 青山慶之助 浅川八郎 浅野芳朗 麻生アト 阿部柳太 尼緑之助 天見幸雄 阿万幸雄 有信新之助 安平次弘道 池田あや子 池田古心 池田泉水 井阪東天紅 石居高志 石川侃流洞 石倉旅風 磯坂新雪 磯野三石 市岡曉舟

市場没食子 出原敬一 出原直奇 伊藤茶仏 井上湧三 今西章雅 岩田ひさお 岩田美代 岩谷二三枝 岩本雀踊子 上田紅溪 植村客遊子 魚住満潮 臼井三林坊 江国幽谷 江副牛亭 榎本吐来 王塚紫 大塚勇 岡崎祥月 大江秋月 小笠原青女

岡田拳法 岡田某人 岡村久志良 小川静観堂 小川恒明 隱岐不醉 置田ふじ 荻野鮫虎狼 荻谷弘朗 奥村丹治 奥坂形水 大坂博正 大崎良子 太田良子 小田垣蝸牛 大谷月都 越智一月 大鶴喜由 大西八歩 大野克枝 小畑自有浪 小畑牧人 大森娛句楽

大山と金 香山醉々 笠原吸江 葛城伊三郎 加藤河産 加藤貞山 金井文秋 神谷凡九郎 賀本凡九郎 河井庸佑 河岡靈眼子 川岡弘生 川口弘生 川崎秋風 川竹松風 河原みのる 河端柳子 河村満子 河村瑞川 河村好郎 河内天笑 神原幸児 菊田いさむ 菊沢小松園 岸南柳 黄瀬美秋 北川春果

橘高薰風 北村三歩 木村千容 木村洞 木村涼人 木村遠次 木山要 草深醉升 国弘半休門 久米奈良子 藏本白梅子 黒川紫香 桑原喜風 工藤甲吉 小池しげお 小出智子 小野君子 河野蘭幸 小島仙山 小谷白汀 高津徹也 高西無鬼 小西雄々 小松義雄 児島与呂志

小幡里風 小林孤呂二 小林孝正 小林トメ子 小林由多香 近藤凡生 雑賀勉 酒井五 坂井三葉 酒田清子 桜川不水 佐野ト占 佐田平八 沢田木石 志賀七面山 直原弘美 四方天弘 島居百酒 清水一保 清水義介 清水谷句楽坊 城川一舟 新城博也 新谷笑痴 菅井智水庵 傍島静馬 高木桃里

田垣方大 高杉鬼遊 高橋鬼焼 高橋千万子 高橋操子 高橋翁童 竹内圭三 竹内翁三 竹内綾女 竹中肖二 竹浪浪寿 田中蛙眠子 田中狂二 田中十方 田中万里歩 谷中無閑 谷垣史好 田村藤波 垂井葵水 津秋六花 築山快夢起 辻圭水 辻白溪子 辻喜仙 土谷城石 恒松町紅

天正千梢 遠山可住 土岐トク子 時広一路 都倉求芽 戸田古方 友淵貴山 飛田好一 内藤幸子 内藤きさ子 仲藤どんたく 中筋三幸 中村ゆきを 中川淳子 中川晃男 中川滋雀 中島英断 中島小石 柳生々庵 柳鶴丸 長野文庫 永藤弥平 永松道雄 二越春翠 新岡回天子 西岡いわを 西尾公作

西尾青一 西尾路栗 西岡洛醉 西川誓二 西辻竹青 西野生長 西森花村 西垣錦風 西出柳宏子 西坂一栄 野田つき子 野田素身郎 野田太茂津 野村味平 野村岬月 羽原静歩 浜田光治 浜田義一 浜田久米雄 浜田奇童 浜野胡蝶 林胡葵丘 林蒼蛇楼 林瑞枝 林夢紅 林野甦光

原田明春 原田独仙 長谷川三司 長谷川紫光 長谷川義英 馬場夢生 馬場魚山 久家代仕男 菱田満秋 兵井虎声 平尾太希志 平野実男 平田青夜 弘津柳慶 福井野迷路 福井多蘭子 福井鉄児 福田丁路 福田清夢 福間春日 藤井二三 藤井一三 藤岡花梢 藤岡明朗 藤井三夫 藤田軒太楼 藤田茂美 伏見茂女 藤村バ

舟木与根一 古川静波 古川麗花 細呂木魯木 堀江正朗 本庄金三 本多清人 本多惠朗 本柳志朗 前山北海 正本水客 増田次章 榊岡路児 松岡委瀟浪 松川杜的 松川たつみ 松本梁水 松本吉太郎 松本忠三 丸川初甫 丸川青丹子 間生青丹子 満生拜山 三井醉夢 水谷竹荘 水粉千翁 光好陽子 宮尾あいき

何を選んでいただくかは先様におねがいして  
**タカシマヤの商品券を**  
 お贈りするのにも心に  
 くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から  
 一〇〇〇〇円迄  
 大阪・東京・京都  
 3店に共通です



大阪・なんば  
 東京・日本橋  
 京都・四  
**高島屋**

宮川珠笑 宮口笙生 宮地双楽 三輪峰円 村上旭童 村上春巳 村上飄太 村山光輪 室谷徹舟 室井菁居 森川すみれ 森下愛論 森下茗人 吉田圭井堂 吉岡美房 吉岡通児 横山一児 行吉照路 山本立児 山本素郎 山田阿茶 山田静水 山田岳詩 若林千太郎 若田一乃字 吉原紅月 吉田水車 渡辺乱坊 渡辺独歩 渡辺曉童 若柳多志 若本あき坊 若本久志 若本潮花

# ビニール

## 宮口笛生選

ビニールも一枚入れる旅仕度  
 ビニールも一枚入れて旅仕度  
 ビニールの風呂敷走る俄か雨  
 ビニールの中で金魚の目があわて  
 ビニールで冬籠りする軒の鉢  
 ビニールで包めば衛生的に見え  
 水道のビニール綱帯して越冬  
 ビニールのハウス南国土佐ぬくし  
 実用化してビニールが巾きかせ  
 ビニールに金魚屈託ない泳ぎ  
 ビニールのミはお花のオアシスよ  
 ビニールの過保護母の味が落ち  
 ビニールの捨場に困る文化国  
 ビニールの風呂敷代は損をせず  
 ビニールのトンネル春を引き寄る  
 ビニールの下で値を待つ桜草  
 褒められてビニール製と言ひ切り  
 塵芥を入れてビニール二度の役  
 使い捨てられたビニール持て余し  
 返さぬを承知ビニール傘を貸し  
 馬鹿にしたビニール紐で指が切れ  
 カラフルなビニール旧家になじまぬ  
 ビニールの中に何<sup>も</sup>グリーン<sup>の</sup>芽

克枝  
 木魚  
 初甫  
 新之助  
 いわを  
 綾女  
 露杖  
 南奉  
 双楽  
 正夫  
 祥月  
 秋女  
 弘明  
 夜孝  
 白汀  
 代仕男  
 ろ亭  
 パット  
 松人  
 伶花  
 輝親  
 翁童  
 曉童

ビニールに命あずけて金魚着く  
 とりあえずビニール製で整える  
 裏窓は当分ビニール貼っておき  
 ビニールの傘で水さす人をさけ  
 ビニールに包んで奇麗なものに  
 ビニールに包む土産のあつけない  
 ビニールのちよこつと穴のあいた  
 ビニールを便利がられて捨てど  
 ビニールの公害海へもする波及  
 ビニールに包んで上げた空の青  
 ビニールの袋で金魚旅に出る  
 ビニールに包む綿菓子夢がな  
 用済みのビニールを邪魔がら  
 ビニールを冠<sup>つ</sup>て奈良の雨に濡れ  
 ビニール袋金魚が寄道許さない  
 青果みなビニール着てる冷蔵庫  
 ビニールをへだてて冬と春の風  
 ビニール製でも真心は有難い  
 なにもかもビニール袋の市場籠

智司  
 素身郎  
 英子  
 ふみよ  
 藤波  
 静歩  
 古方  
 一治  
 季贊  
 文風  
 曉山  
 醉々  
 七面山  
 宵明  
 求芽  
 章雅  
 可住  
 扇水  
 軒太楼  
 思月  
 秀峰  
 十止庵  
 信二  
 千翁  
 古方  
 柳子

## 理想

## 松川杜的選

青年の理想読書でまた変り  
 理想的です生命線だけをほめ  
 三人の子供へ修正が要る理想  
 青年の理想笑顔できいてやり  
 割り切れぬ理想へ白い雲が飛び  
 理想には遠く老妻花を助け  
 理想論だから敬語をつかわない  
 理想からそれでも廻り道だと信じ  
 年々に理想の円が狭くなり  
 子それぞれ親の理想と別に生き  
 理想よと言ってほしきが見えてくる  
 3Cの理想も遠い過去の事  
 理想は聞かぬガムの娘はよく照れ  
 上役の理想論について行けず  
 地下足袋が理想に合はぬ門構え  
 理想論ばかり唱えて友がない  
 ホステスだけが相槌打っている理想  
 金のある木でもあるような娘の理想  
 成人の日だ青年の理想聞く  
 代表の答辞でつかい理想像  
 カック良い制服理想と錯覚し

十止庵  
 信二  
 可住  
 魚山  
 千翁  
 初甫  
 扇水  
 求芽  
 潮明  
 近江  
 醉々  
 七面山  
 季贊  
 一治  
 藤波  
 素身郎  
 森魚  
 輝親  
 国彦  
 パット

軸  
 ビニールのハウスに蔭だまされる





# 川柳家の暦

(三月生まれの人)

「川柳家の暦」は故白柳さんが数年間この取材に走りまわった労作である。十二月分までノートに書かれてあるので順を追って発表していくが、句は白柳さんが選んだもので作家の代表句という意味ではない。  
(編集部)

遺稿 清水白柳

1日 石井青馬 T2 癸丑 岡山  
煙突を抜けて煙の型になり  
1日 浜畑胡蝶 T12 癸亥 大阪  
ふるさとの波も騒いで迎えられ  
1日 林一徳 T14 乙丑 神戸  
忍従の胸にたんで禅に似る  
2日 葵徳三 M36 癸卯 大阪  
偽りはペンを握りしより生る  
2日 佃嶺月 M38 乙巳 大阪  
待て暫しなどと洒落てる儲け口  
2日 西田柳宏子 T9 庚申 大阪  
人は人 我が道を往くマイペース  
2日 辻圭水 T14 乙丑 大阪  
もう船が見えぬにテープ持ったまま  
3日 青柳三四郎 M45 壬子 京都  
煙突を逃れて雲になるつもり  
3日 工藤胡里 S6 T巳 福岡  
孤独感しきり青空あるばかり  
4日 八木摩天郎 M35 壬寅 堺  
情熱の歌人 晶子を思ふ海  
4日 本多柳志 M36 癸卯 大阪

学力の程度 左派にもなり切れず  
4日 塩見一釜 S8 癸酉 小樽  
赤レンガ明治のとばけきった貌  
5日 宮尾あいき M44 辛亥 大阪  
みじめさを見せまい涙のみ下す  
5日 伊東静夢 T4 乙卯 尼崎  
パレットの先独善を掬いとる  
5日 窪田久美子 S4 己巳 東京  
身をめぐる水庵きまま結氷期  
5日 松本芳味 T15 丙寅 浦和  
そんな眼付で俺は許されたくはない  
5日 中津泰人 T6 丁巳 呉  
他人には良い人だから妻のぐち  
6日 森田昆味 M21 戊子 西宮  
ひと時の余白を埋める耳掃除  
6日 西尾菜 M42 己酉 八尾  
横町のその横町の握りずし  
6日 小林朝陽 T6 丁巳 神戸  
6日 平井敏雄 T13 甲子 東大阪  
日帰りの実家で遠慮のない昼寝  
6日 山口真須子 S9 甲戌 明石  
あの人の良さしみじみと受話器おく

6日 古川静波 S5 庚午 大阪  
乳飲ます妻は聖母の影のよう  
7日 小田二十貫 M43 庚戌 東京  
老い無転赤いネクタイ見事とも  
7日 林夢虹 S13 戊寅 豊中  
女の眼 女は敵としてうつり  
8日 上岡一藤 M41 戊申 岡山  
掌に真珠遊ばせ餓えている  
8日 堀豊次 T2 癸丑 京都  
妻のものの買い鮮明な街を帰る  
8日 久家代仕男 T9 庚申 松江  
誤字あて字まかり通った盲判  
9日 池谷はる S3 戊辰 吹田  
二人の焦燥が似ている思いきりブランコを漕ぐ  
10日 河野春三 M35 壬寅 高槻  
これだけはわがもの指紋愛しける  
10日 大森娛句楽 M35 壬寅 岡山  
ひとしきり満座ストロン節が占め  
10日 中島小石 M40 丁未 大阪  
なやみ持つ胸に青空 青すぎる  
10日 丸岡泉里 T2 癸丑 伊東  
ついているなどと身の程わかまえる  
10日 室田千尋 S4 乙卯 神戸  
倅せな日日大切にものを云う  
10日 山内静水 T5 丙辰 竹原  
有言実行迷惑がられ恐れられ  
10日 菱田満秋 S3 戊辰 東京  
男の眼すでに衣服を剥いており  
11日 藤井赤とんぼ M33 庚子 北九州  
コップ酒馬は夜露に濡れている



11日 宮西弥生 S9 甲戌 八尾  
 晴れ姿 鏡の中のひとりと  
 12日 浅田 扇塚坊 T9 庚申 千葉  
 折入って頼む団扇の裏表  
 13日 大井正夫 M36 癸卯 姫路  
 入墨の老職人が世を笑い  
 13日 荻谷 たかし T8 己未 土佐  
 妻に似たくしゃみで次男起きてくる  
 14日 藤岡 花 梢 M41 戌申 富田林  
 駅前に住んで今夜も濡れて来る  
 14日 光森 良 T5 丙辰 神戸  
 青空が遠くて心通じない  
 15日 飯降 白 香 M44 辛亥 奈良  
 知性などふみにじられて村にすみ  
 15日 中西 一步 T2 癸丑 中村  
 下戸という言葉にのった見合の日  
 15日 戸塚 無 門 T14 乙丑 呉  
 スタートを陽気な嘘で出る四月  
 15日 瀬尾 照一 S19 甲申 大阪  
 しあわせを呼ぶメガホンはどこにある  
 16日 伊志田 孝三郎 M29 丙申 名古屋  
 美しきかなしき夢はまた見たし  
 16日 上林 粗 影 M37 甲辰 宇部  
 葱白し妻の欲望満ちたらず  
 17日 竹崎 寛 S5 庚午 高知  
 二人いま愛のもろさを意識する  
 18日 杉山 甲太 M40 丁未 東京  
 鯉節さか目の音へ母が来る  
 18日 高田 光 穂 T11 壬戌 札幌  
 ハンカチを覆い夜汽車の身だしなみ  
 18日 矢高 勲 T15 丙寅 和歌山

海面の輝移り月移る  
 19日 永田 六龍子 M37 甲辰 大阪  
 独り酌ぐビール愁しい詩をみつ  
 20日 鈴木 鋭 郎 M36 癸卯 高知  
 中折のまえをつまんだ父を連れ  
 20日 西田 春 樹 M42 己酉 宝塚  
 20日 北島 醇 醉 T3 甲寅 佐賀  
 も一つの服につけてる赤い羽根  
 20日 小島 蘭 幸 S23 戊子 竹原  
 笑い声ひとつの屋根の下に住む  
 21日 小西 無 鬼 M37 甲辰 兵庫  
 神様を鈴で起して頼んどき  
 21日 故 清水 白柳 M38 乙巳 大阪  
 春日遅々として仁王さんねむくなり  
 21日 木村 三雷波 M38 乙巳 松江  
 手袋をぬぐは十円拾う指  
 21日 高野 不二 S5 庚午 新潟  
 野球嫌いがいるのをテレビ知らんのか  
 22日 浪 玲之介 T2 癸丑 大阪  
 上り台子無き夫婦が立止り  
 23日 正谷 柳狂子 T4 乙卯 芦屋  
 籠編んで春逝くことを悲しまず  
 25日 梶川 蘇 堂 M38 乙巳 西宮  
 勝負とはかくもきびしき紹の袴  
 25日 志水 剣 人 T2 癸丑 横浜  
 孤独よし風のある日の背をまかせ  
 26日 小林 孤呂二 S2 丁卯 松江  
 金の威をまのあたり見て御堂筋  
 27日 落合 思 月 M36 癸卯 東大阪  
 父だけの刺身をやめて五年たち  
 27日 影山 つる子 M44 辛亥 京都

楽しさ苦しさ少しずつあり今日終る  
 27日 野本 未 達 T5 丙辰 高知  
 犬しいた車の色を忘れまい  
 28日 福井 天 弓 M37 甲辰 岡山  
 二十余年満鉄の飯たべた幸  
 28日 若柳 潮 花 M41 戊申 高槻  
 囲われたマッチだ風よさからうな  
 28日 奥村 丹 路 M43 庚戌 兵庫  
 美しきに如かず子の鼻つまんどき  
 28日 月 原 宵 明 M43 庚戌 今治  
 正しきが勝つとは歴史言わざりき  
 28日 後藤 朋子 S2 癸丑 仙台  
 真夜中の振子が俺を放さない  
 28日 松山 温 子 T5 丙辰 福知山  
 噂にもならずじまいの帯たたむ  
 29日 武藤 奇智朗 M36 癸卯 東大阪  
 苦難の児気ままを云わぬいじらしさ  
 30日 今村 良之祐 M30 丁酉 京都  
 燃え上る風呂の明りに下駄が見え  
 30日 西尾 公 作 M41 戊申 和歌山  
 遠慮のない酒で車を置いて去に  
 31日 石森 騎久夫 T4 乙卯 長野  
 物欲の街行きずりの顔笑る  
 31日 谷口 恵 郷 T5 丙辰 岡山

★

▼数字だけで大正か昭和か不明の分は省き、  
 句のないのは適当に入れました。(編集部)

# 初歩教室

——題「進」——

本田恵二朗

後進に道を譲れば食べられず 利美  
粗品進呈女房まんまと引っかかり 同  
ではないのだが、現代では、妻と表現するのが正しくもあり、一般的であり、品も良い。  
川柳人は、女房という言葉を入れた句が生れたら、妻と言ひ換えてみる努力をして欲しいと私は提唱する。そこで、女房を妻に換えてみる。(粗品進呈まんまと妻を引っかける)  
進学期叱言と一緒に来る為替 露杖  
やるだけはやった進退預けます 露杖  
下降線いつまで続く進度表 露杖  
この調子が、あなたの持ち味らしいよ。  
一ミリの中で微菌大行進 失名  
渋滞をさす先頭の遵奉車 失名  
しんがりを行けば走る日の多く 失名  
句箋に雅号が無かったので、失名となつてしまつて、句主に相済まぬこととなつた。三句共に、よくまとめられた。ご精進あれ。

熨斗つけて進呈しますと大きく出  
ご進講ああそうあそうとうなすかれ  
まさひろ  
やきもきも進退きめず洞ヶ峠  
まさひろ  
(やきもきへ進退見せず洞ヶ峠)  
縁談の人は別の恋進む  
佐知子  
(縁談はどこ吹く風と恋進む)  
電話日に一度はかかり恋進む  
佐知子  
(日に一度受話器をとって恋進む)  
練習の蔭に進歩が姿見せ  
双楽  
(練習の蔭から進歩の芽がのぞき)  
新進のライバルがいてファイト湧く  
近江  
(新進に負けまい駄馬に鞭をあて)  
昇進は全身心を粉に砕き  
一二三  
(昇進へ全身全霊粉に砕き)  
形だけのテストで進学する特技  
洋敏  
(型だけのテストで進学した不思議)  
人類の進歩が海を埋めたる  
誓二  
(ニッポンの進歩は海を埋めたる)  
進行中と母にはそと打ち明ける  
杜月  
(母にだけ進行中よと打ち明ける)  
進まねば退く事になる原理  
文子  
(進まねば退くことになると知り)  
口惜しさに耐えて進もう明日のため  
孜孝  
(口惜しさを奥歯で殺し進む道)  
高度成長ヘドロで田子の浦を埋め  
静観堂  
(躍進の犠牲田子の浦の歌が消え)  
数々の公害も日進月歩なり  
孝華  
(公害も日進月歩の列に在る)  
うわさ背に進む決意へ女賭け

(賭ける気で進む女へ湧くうわさ)  
進行はしてても二人手もふれず 茶々坊  
(手もふれぬままできれいな恋進む)  
進歩的な男のはずがおいまじない 同  
(進歩的なひとがお守り買つていた)  
一旦は進めた駒へ指が行き 肖二  
(一旦は進めた駒を指が追い)  
進退を伺い不問に首をなで 賛平  
(進退伺い不問にされた首をなで)  
対話進まず大臣の水虫め いづみ  
女性上位時代だ。女性作家元気がいいよ。  
期待した新進気鋭の勇み足 翁童  
進歩と調和こわすのにまた金が要り 万竿  
引くことも進みもならず重たいよ 類次  
座五の「重たいよ」はよかった。正直なところを言つたらしいが、なんとなくユーモラスであり、無邪気でもある。精進あれ。  
年始客すすめ上手で皆トラに 富士  
(すすめ上手年始の客をトラにする)  
ねばるほど進んでいない芸の道 比呂路  
幕進するブルに待ったをかけた土器 比呂路  
句材をとらえる眼力が進歩したよ。叙法でもう一と苦勞しよではないか。  
栄進へゴルフ麻雀猛烈社員 濁水  
(エリートコースゴルフ麻雀幕で進み)  
前進は出来ずバックはなお出来ず 洋々  
進歩の意見を町内でも余し 洋々  
この調子が、あなたのものでなし。頑張れ。  
先進国というのが早い釜ヶ崎 繁子  
(先進国の裏を見つけた釜ヶ崎)

進退伺い出して反応みるずるさ 綾女

『ずるさ』まで言ってしまうなくて、読者にずるいなあと感じさせる方が、うまい表現だと念頭において作句してみることを知って欲しい。すると句に味がついてくる。

(進退伺い出して反応みるつもり)

人生は戻る道なく進むのみ

藤 持

川柳は格言であってはならぬ。格言めいた句が生れたら、それを川柳に改正しなくてはなるまい。句材はよくとらえている。

(人生街道バック出来ないから進み)

僕は進学父母青くなり

久 子

(ボク進学するよと親をあわてさせ)

進学の希望両親があきらめず

保 子

(親の方が進学希望をあきらめず)

## 川柳塔社常任理事会

二月四日午後六時から常任理事会が本社で開かれた。

あと数日にせまる白柳氏の追悼句会が議題の中心である。会場の以和貴荘が九時までより使えないので、進行をよほどうまくやらないと会場側の迷惑になる。

路郎忌運営の再検討、万的、杜的両氏の刊行句会が三月。ことはどうやら動きのほげしい年になりそうである。

空席になつていた編集長は橋高薫風氏ときまる。故白柳さんと共に他社との交流にはうってつけの人である。

浜田久米雄氏に五月号から「秀句鑑賞」を

予報では進路にあたる台風圏(台風の進路に孫が子がいいます)

進化論公害までは予言せず

志 津

(明治より進歩重ねて花開く)

露 芳

(明治大正と進み昭和で花開き)

秀 村

(屠殺所牛は進まずのろのろと)

生 仏

(屠殺所と知ってか進まぬ牛の列)

新之助

進行方向に席をとる妻と旅

準 人

旅と言わなくても旅だと判る表現が望ましい

(進行方向に席とる妻の若やいで)

静 子

(十代の恋は口づけで早や進み)

三十四

初詣進退極む渦の中

この教室を今回で満二年相勤めたので、次期

担当していただくなど盛りたくさんの二月例会だった。

出席 古方・水客・薫風・多久志・柳志・万の・生々庵・庸伯・菜・葵水・文秋・柳太・小松園・一三夫諸氏。

▼柳 界 短 信 ▲

▼柳界注目の本年度の東洋樹川柳賞(賞金五万円)は番傘川柳社の一般近詠選者の柴田午朗氏(島根県)と決定。あまたの反動に屈せず、本格川柳に詩性を導入した選句態度が評価されたもの。なお氏の句集「瘦せた虹」は千部売り切れのことお祝い申しあげる。なお同賞贈呈川柳大会は四月十八日舉行。

▼堺市農協の機関紙「農業時報」に「公害」

担当者へ、バトンを渡したいと、申出たところ、断じて止めさせぬと、きびしい返答が、はね返って来た。そこで、なぜ止めさせてもらえぬのか、三日三晩考え抜いて、どうやら発見したことは、『お前みたい、心臓の強い奴は、ざらにはいないからだ』ということであった。こうなると老骨に鞭打って、皆さんとの対決を続けるより外はあるまい。鉢巻を、きりりとしめ直して、頑張るつもりだが、皆さんも、鉢巻をきりりとしめ直して、恵二郎攻略の策戦を練って欲しい。今日まで、この教室にタツチした柳友の数は一二〇名となったことを付記しておく。

三月二十日締切題「横」(五月号発表)  
宛先、岡山県倉敷市下津井三五二番七十一  
本 田 恵二郎

を八木摩太郎選で発表。

## 四月新学期会員募集

三大モットウ 短期速成  
費用低廉 親切指導  
(規則書送ル)

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目  
千五四二 誓得寺内

関西奇術教室

電話四七二二八

大 萬 川 柳

「胃」 入選発表

選者 川村好郎  
 投句総数 六百九十三句  
 入選 五十二句

藤沢好雄  
 きき酒よここまで来いと胃がま

胃袋をなだめなだめしてはしこ酒

鳥取佳女  
 胃カメラに胃のご機嫌を伺わせ

漱石の苛立ちを知る胃の痛み

八代史朗  
 一億の胃をおどるのCOMASHAL

飲み慣れぬ超特級に胃が慌て

東大阪弥生  
 半分の胃へ妻子に頼られる

胃のせいにして二次会を抜ける恋

宝塚ゆきを  
 税務署を出たらしくしく胃が痛み

貸付けの笑顔で消えた胃のもたれ

大阪代世  
 青白き天才胃薬離さない

俺の身にもなれと胃袋怒り出し

西条恒子  
 胃ぐすりの事なら薬局ほどに知り

飲みたがる胃の腑を財布叱りつけ

板井雀踊子  
 胃袋の素顔のぞいてきたカメラ

胃袋がもひとつ欲しいバイキング

松江富喜子  
 胃袋を切ったはったで名医なり

抜群の胃袋両刀使いなり

堺天笑  
 回虫のど肝を抜いた胃カメラ

もう少し噛んで入れると胃がご

真沙子  
 胃が気兼ねするほど食べる里帰り

胃袋が微苦笑してる二日酔

大阪頂留子

快復の胃をたしかめる猪口を受け

大阪比呂路

胃袋の機嫌きいてみる三分粥

盛装を脱いで胃袋満ち足りる

神戸孜孝  
 十八の胃袋家計を脅かせ

胃から見た家計近頃豊かそう

大阪茶坊  
 割勘の宴会あとは胃にまかせ

佳句  
 急に胃が重とうなった宝塚ゆきを

倉敷里風  
 胃のありかたしかに知った祝酒

大阪君子  
 胃を満たしてからは会話に底が

尼崎利美  
 アルコール漬けのわが胃と初対面

堺真沙子  
 胃袋と財布がもめる昼のベル

倉敷千翁  
 胃を切った話を聞いてから痛み

堺圭井堂  
 胃袋でくすり同士がもめている

倉敷扇水  
 胃の調子知ってる妻の酌で飲み

大阪智子  
 ご機嫌で帰る夫の胃を案じ

大阪慶之助  
 胃が口をきけば有給休暇くれ

東大阪弥生  
 半分の胃に詫びている千鳥足

堺青香  
 肝臓も同調をしてストに入り

倉敷里風  
 胃袋がまた冷戦だかと思

羽曳野吐来  
 胃の手術早く終わったから案

天ノ句  
 胃袋へ突如胃酸加里が来る

胃癌かも知れず女房やさしすぎ

米子千代  
 通院の胃へ妻までが合す膳

貝塚つき子  
 バリウムに胃カメラ撮る不安

選者吟  
 胃袋へ突如胃酸加里が来る

西宮多久志  
 母となる嬉しさ嘔吐がまんする

寸評  
 一、想像通り胃癌、胃カメラ、胃

胃解剖から殺しのホシが割れ

と手術、薬酒等に関した句が沢

山あった。当然入選すべき句で

ありながら、より以上表現、内

働いた粗食胃液に迎えられ

岡山白水

容に秀れた句が出てきたので惜しくも捨てたので、句想範圍のせまい題にはあり勝ちで七百句近い投句があることを頭において作句すべきでしょうね。  
 「胃」よりも脳、血圧の方が適切な句があった。所謂こういう題には動く句を作句しやうい。こんな点も吟味しましょう。  
 四十六年度

ベストテン (二月現在)

- 一 どんたく 神戸 六、〇
- 二 里風 倉敷 五、五
- 三 千代 米子 五、〇
- 四 真沙子 堺 四、五
- 五 ゆきを 宝塚 四、五
- 六 扇水 倉敷 四、〇
- 七 文秋 大阪 四、〇
- 八 つき子 貝塚 三、五
- 九 恵二朗 倉敷 三、〇
- 一〇 木石 下関 三、〇
- 一一 瑞枝 米子 三、〇
- 一二 一三夫 大阪 三、〇
- 一三 弥生 東大阪 三、〇
- 一四 智子 大阪 二、五
- 一五 美房 大阪 二、五
- 一六 圭井堂 堺 二、五
- 一七 代世 大阪 二、五

以下略

昭和四十六年度第四回  
 「要求」 五句以内

締切 三月二十日

第五回  
 「朝食」 五句以内

締切 四月二十日

投句先  
 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

郵便番号 五四二

川柳塔社 大萬川柳係

★大萬川柳大会は記録的なご出席をいただきお礼申し上げます。 大萬川柳会

## 阿万万的・松川杜的 共著

序文 中島生々庵主幹・正本水客氏

お待たせしました

### 句集「的」

送料 四百円共

感じの句をもって新風をおくる万的・杜的のダブル「的」は本誌でもおなじみです。  
 優雅な日本画を見erような句が全ページを彩ります。

発行所

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

〒542

川柳塔社

振替口座大阪・三三三六八番

発刊いらい大好評！



松川杜的



阿万万的

# 柳 界 展 望

あちらからこちらから  
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼第十六回全国川柳作家年鑑の作品が募集されている。自選十句(新旧作を問わす)、郵便番号・都道府県名、住所、姓と雅号(ふりかなをつける)、職業、年令、昭和四十六年四月三十日締切り、参加費五百円(句稿と同送のこと)、投稿は31奈良市西大寺国見町一丁目一の四一伊藤勢火宛。主催、ふあうすと川柳社。

永平寺宿泊申込者多く三カ月前の申込制になっているので諒承のこと。兼題その他詳細は後日決定の上、追って掲載します。諸事連絡は姫路市北条二五〇鉄橋四〇大井正夫宛。

▼まずかつと誌一月号の公開討論の発言の中に、「川柳塔についても路郎の死後は本当の意味の統卒力はなくなつた。」とあるが、路郎は激しい性格だったから、謀反や離反に屢々悩まされたことは発言者もよく知っている筈だし、「川雑」と「塔」とは性格もまた異なる。はつきりとこうした発言をされると、こちらが戸惑ってしまう。また、「風来子」が海外に出て識見を深め、それを二年有半も続けて書いている。これは個人の見聞であるが読者柳人を啓発していると言える。というのも、風来子氏に追

しようする類いの発言で、紀行文を素直に受けとつても、いい気なものだ、あちちで苦笑を買つていはいはないかと思えるふしもあり、見聞記がこもる続くのは如何がなものであるのか。▼川柳紋土、川柳三重、柳宴の諸誌が相次いで値上げになった。

▼川柳道場が百号を迎えたのを記念して全選者互選作品を募集、大賞は、加地一光氏のべつべつに夫婦がさがす明日の色に、準賞は、小野克枝さん(倉敷市同人)の、葬列のうしろで明日の策を練りに与えられた。水粉千翁氏をはじめてとする道場諸氏の益々のご精進をお願いする。

▼たけはら(竹原市)三月例会は酒井日出夫卒業記念を兼ねて三日(水)夜七時から、山内静水居で。兼題香り・政治・明日。

田乱耽追悼句会として一日(月)午後六時から大阪美術倶楽部で開催。

▼住田乱耽を偲ぶ会は二月六日(土)午後一時から京都河原町今出川の割烹「西角」で催され、乱耽未亡人をつゆ女、堀口塊人、増井不二也、松本波郎、伊藤入仙の諸氏と薫風らで故人を偲んだ。

▼深沢英俊著「美すゞと長野柳壇」は長野市吉田五の二四の十一川柳美すゞ吟社から発行された。三百余名の戦時、戦後の作品三百九十余句が収められている。定価六百元、送料六十五円。

▼ふたば二百号記念川柳大会は三月七日(日)正午から豊中市民会館(阪急宝塚線宮根駅下車スグ)で開催。兼題、ふたば・二百号・よろし。川柳・記念・大会・よる。各題三句、投句は二月末日までに豊中市原田北町五三ふたば川柳会宛。投句料無料。

▼川柳やまくち十二月号は笠戸大橋完成記念近県川柳大会作品集を掲載。

▼川柳オホーソク十一月号は北海道川柳大会作品を特集。



## 新 同 人 紹 介

原

田 明 春

— 靈眼子・生々庵推薦 —

藤

田 軒 太 楼

— 緑之助・独仙推薦 —

恒

松 叮 紅

— 緑之助・祥月推薦 —

島真澄方の新事務局から発行になった。久しぶりに河野春三氏が執筆、時実新子選の水莖集が新設された。▼国鉄川柳九十七号に、萩野鮫虎狼氏（岡山県同人）は「国鉄川柳集への感動」を、浜田久米雄氏（岡山県同人）は「句碑の建つ前夜」の一文をそれぞれ執筆された。▼土居耕花川柳句集「笹の花」が昭和四十五年十一月十五日岡山県英田郡大原町笹岡二一〇土居耕花方から発行になった。本田恵二朗氏の序に、「どの頁にも彼の体臭がふんと匂いたってさてもにくらしき奴と感ぜずにはいられない。彼が長

年の間、愛し、且つ主張するユーモアの味を、この句集は、万人に満喫させ、このころよき微笑を誘うであろう。」とある。鮑屑になつても木の香持ち続け痛くないところを押えて医者が去に▼和歌山短詩型文学クラブ七面の昭和四十五年度川柳部門の最優秀句は、菅井智水庵氏（和歌山市同人）が獲得、新年句会の席上で優勝楯と賞状を受けられた。切実な話まさかであしら

された。産褥にリボンをつけし蠅叩▼福島鉄児氏（門真同人）は軽い脳卒中中で病室があき次第入院されるとのこと、一日も早いご全快の朗報を待ちます。▼西辻竹青氏（奈良県同人）は観光道路沿いの私有地に句碑を建立、大和路を訪う人の旅情心をそとる桜と風の並木を造られた由。何時来てもよし大和路の四季の花▼池田蛙浪氏（岡山県）は古稀を自祝して、俳名池田土城の名で、「美作俳諧史」を発行、かがみ川柳社の誇りでもあり好評を得られた。

は一月十一日から三泊四日の日程で台湾旅行を楽まられた。しかし氣候の変化で風邪をひかれたと。▼後藤梅志氏の一周忌法要が一月十五日午前十時から故人の宅で営まれ、西いわを、有信新之助両氏と薫風が霊前で追憶談を交わした。

▼東野大八氏（美濃加茂市）からの一月二十日附便りに、「僕の半世紀の親友豊田穠が本日直木賞を獲得ひとりて乾杯中です。彼は今今連旅行中、僕と一緒に、行こうよといつてたのが、ひとり旅の留守中に朗報というわけ。ニククネーエム「長官」彼はミッドウエー生残りの海軍大尉です。」

# 本社 白柳追悼句会

会場 以和貴荘  
八日 午後六時

二月は肌寒い風が街を吹く、会場内は心暖かい柳人で満ちあふれている。故白柳さんを偲んでこんなたくさん集つてくださった。生々庵主幹はあの日から今日までのことがらを「白柳追慕日記」のように語られた。小松の伊藤茶仏氏は故白柳氏と少年時代からの親友で、その五分間の話のなかに長い年月が流れ、「せんば主幹」の岡橋宣介氏も哀切きわまりない口調で人間白柳を語られた。各柳社の首脳部がわざわざ駆けつけてくださった。故白柳氏の交友地図がここにある。各選者は、閉場制限のある会場だけに、披露前の寸時を故白柳さんにふれられた。故白柳さんは「川柳タレント」のようだった(徳三氏談)。川柳屋は昭和二年だから現役では最古の人か(萬葉氏談)。各柳社とのつながりは白柳氏あつてのことではないだろうか。この人がいなくなつた今日、川柳塔は柳界と断絶するようになるのではないだろうか、惜しい人を失つた(清造氏談)入院された当時、見舞いに行つたら絶対安静だといふのに、選句したり、通信の返事をベッドの上で書いていた。この人情の厚さを弟子の私は受けつきたい(柳宏子氏談)多くの方からの電報。遺族と菜氏からのお

供養。故人の柳誌など、やつぱり白柳さんはもういない。  
清水家からは、いちの未亡人、長男健司、長女愛子、次女加津子の皆さんも出席。

月間賞杯は香川静々氏。(河井庸佑整理)  
出席 古方・季賛・義英・与呂志・新之助・文秋・茶仏・一三夫・双葉・花梢・喜美代・柳志・吉太郎・美芳・滋雀・今雨・一舟・没食子・水客・榮・作二郎・微舟・瓢太・勝晴・英断・凡九郎・鶴雪・徳三・百酒清造・約一郎・喜風・杜的・史呂・葛城・水京・摩太郎・生々庵・万葉・維久子・静馬・野迷路・天樹・笑痴・南柳・柳信・眉水・葵水・千寿子・宣介・静々・河産・左久良・醉升・柳宏子・美代・金三・綾女・狂二・誓二・芳川・聡夢・言也・茂美・好一・圭井堂・天笑・いさむ・竹莊・肖二・一治・清人・一二三・多久志・万的・凡吉・つき子・儀一・牧人・頂留子・史好・鬼遊・庸佑・智子・君子・静歩・修史・薰風・小松園・宏子・あいき・いちの・健司・愛子・加津子・葉子

## 席題「光る」

英 徳三選

光つてる方が本物らしい見え  
年の功光る頭を撫でながら  
ギョツと立ち止まらせた仔猫の目  
そう言えばイミテーションと光る  
御心に埃気になる黒光り  
傷心に一番星がよく光り  
終いまで言う涙を拭き給え  
地味好みしうい光りの方を取り  
シャボン玉春の光りの中で割れ  
照らし出されたわが老醜の影さびし  
生々庵  
柳宏子  
左久良  
葵水  
聡夢  
静馬  
つき子  
史呂  
庸佑  
生々庵  
葵水  
生々庵

## 席題「旅行」

金泉 万葉選

ニューモード出来て旅もしたくなり  
子の旅の間おちおち眠られず  
時刻表繰るもう旅に在る心持  
スナッパがこんなに素朴旅の過去  
箸袋だけを土産に旅帰る  
旅行から帰った妻がよくしゃべり  
帰郷する一年先へ積む日銭  
空の旅母はぎりぎりまで迷ひ  
ロカール線の会話に在るひと旅  
カタログを集めて旅行した気分  
筆まめの旅絵はがきを忘れない  
出張の旅ヘノルマが付きまとい  
もう会えぬ名刺もらう旅のこと  
旅の夜を女同士のはかりごと  
世界旅行射止めた顔に紙吹雪  
方言がうれしい旅の道を聞く  
団体旅行あなたまかせの気安さよ  
へそくりも確かめ旅のプラン練る  
滋綾美新之助  
雀女房

秀才で光と影を持つ男  
フラインダー一杯石仏の白光る  
寺の歴史語る仁王の眼が光り  
七光りと思われたくない腕を見せ  
記念写真光っているのが俺らしい  
光るほど拭かねば寺僧氣に入らず  
噴水の裸婦を光りの中に置く  
抱きしめる光赤旗など振るな  
仏像の光は穢き高知らず  
半年の疲れ吹っ飛び灯台よ  
さすり仏の膝善人の手で光り  
どん底にスポットライトが向けられた  
蜜柑むく指をスタンドの中に置き  
徳三子  
萬葉選  
静馬  
杜的  
美代  
圭井堂  
あいき  
花梢  
葵水  
酔秋  
文志  
柳笑  
清造  
新之助  
美房  
滋雀





水見舞長靴はきに戻つて来  
お点前のようにお水を戴く娘  
ボスターの商魂水着にしまし  
洪水だ干害だと水いじめられ  
酔いざめの水はまともに妻を見ず  
台所の水は音から朝となり  
豆腐屋の水は冷たきものならぬ  
水車小屋ももう故里にない景色  
水掛けてお顔をのぞく法善寺  
水打つて花屋生き生き店を開け  
寒の水押しただいた飲む老母  
故里の産湯使つた井戸に立ち  
手洗いの水へ浮いてるちぎれ雲  
水枕ナースの声に素直なり  
水際のはり此の世へ無事戻り  
客足を見て魚屋は水をかけ  
思い出の道はたのしい水だまり  
水たまり新郎妻に甘えられ  
あつさり水に流した酒をくみ  
健康の秘訣に母は寒の水  
水指しに欲しい九谷の壺を買  
減反に水争いはまだ続き  
一杯の水で夫婦の風邪薬  
自白する前に覚悟の水を飲み  
家族みな風邪ひきましたうがい  
水に未だ流さぬ意地を持余す  
熱弁にコップの水が踊らされ  
俺にだけ水くさい娘が気にかかり  
水臭いじゃないかと貯金はたいて来  
精いっぱい生きる倅甘い水  
くさる程米が余るに水喧嘩  
月の石探ろうが古都是お水取り  
水濁りゆうべのネオン夢のよう  
水鼻がそら落ちますと孫笑う

静馬 酔々 千寿子 一三夫 今雨 智子 多美 茂美 多美 久志 三升 一三夫 竹荘 左良 笑風 喜風 柳宏子 柳志 柳宏子 清人 茶一 好一 花梢 多志 万楽 葵痴 天笑 笑堂 圭井 美代 吉太郎 百女 綾也

小半日水垢の茶わん膝に手に  
一滴の水に明暗ある流れ  
亀の池水ありがたいものにされ  
兼題「清」 若本多久志選  
岩清水寛に誰が添えた杓  
清らかな心で孤児の世話に明け  
底辺にいて清濁の境を這う  
清らかな裸身をのぞくフラインダー  
天国で結ぶと清いままな散り  
ビニータン近道をゆく人ならぬ  
清潔な妻で匂いばかりかき  
大鳥居くぐればスリも手を清め  
プラトニッククラブ統一の男変になり  
清らかに澄んだ瞳が母の背に  
清純で売つてヌードでカムバック  
女一人清く暮せば誰も来ず  
一本の清酒友情廻る  
尼寺の清々しさよ簪の目  
プラトニック日記の隅に消えかかり  
清貧に生き過ぎ妻に逃げられる  
お身拭いすませた肌の阿弥陀さま  
清濁合わせ吞めず市井の隅に生き  
山頂に積もれば清い雪にされ  
あの頃の清書大日本とあり  
卒直な質問少女の目がきれい  
清々しい心にさける砂利の音  
清らかな心オランダ坂を下り  
清いまま訣れたことをほめてくれ  
参道に清め塩はど雪が降り  
証人に立つた子供の目がきれい  
清純な乳房ふくらむ娘の水着  
われ一人清し長屋の負け惜しみ  
清らかな恋讃美歌で結ぶ幸

水客 凡吉 摩天 旅風 瑞枝 孤呂二 与呂志 水井客 花梢 柳志 静馬 鬼遊 あいき 徹舟 滋雀 河産 百三 竹莊 茶仏 万断 史呂 史呂 言也 徳京 生々庵 摩天郎

春を待つシクラメン清く清く咲く  
セックスをお医者に聞いた清らかさ  
清らかなデートであれと母願う  
清流のメダカ日本を乱さない  
清潔な信じ合う瞳で見合いする  
清潔なだけでは男たれぬ  
真夜中の清水トネル意識せず  
パイプルを持てばなくらみなど忘れ  
空清く子供と共に呼びかける  
一点のシミを気にする襟白し  
清い愛誓って女守る襟白し  
怪物と言われ清濁併せ吞む  
中年の清い仲とは見てくれず  
盛り塩で清めてカモを待つ構え  
骨肉を葬り何の清め塩  
清らかに写経の瞳虹を描く  
清潔は白衣にピンと虹がきき  
王朝の水の清さのまますぎる  
清らかな方へこの恋なんとしよう  
多志 芳川 万志 杜歩 静一郎 柳志 水京 柳宏子 肖二 好一 鬼遊 天子 茶仏 天笑 野路 天樹 吉太郎 清人 与呂志

ベレー帽立読みをする閑をもち  
還暦の閑達を包むベレー帽  
ベレー帽をかう保険屋のベレー帽  
ベレー帽冠直してから撮らせ  
ベレー帽冠つ小金貯めている  
ベレー帽親子揃えのベレー帽  
ベレー帽親筆を握る無性髯  
ベレー帽男は明治の型でなし  
年などはとうに忘れたベレー帽  
ベレー帽忘れて木枯らし身にしみる  
真紗子 真紗子 真紗子 真紗子 真紗子 真紗子 真紗子 真紗子 真紗子 真紗子

兼題「ベレー帽」

菊沢小松園選

ベレー帽絵を画く人にされてもて  
おじいさん言われたくないベレー帽  
ベレー帽自分の齢を忘れたかけ  
満月をかくすベレー帽だったのか  
大和路をたどるベレーの春の詩  
ベレー帽のうしろ姿にあるゆとり  
一足早く春の来そうなベレー帽  
小銭少々ベレーいつもの散歩道  
ベレー帽真すぐかぶるお人柄  
年寄。おしゃれちよこんとベレー帽  
ベレー着た顔にくめぬ夫です  
余生の火燃やしつづけたベレー帽  
何んこの話しかけたベレー帽  
話好き酒好きベレーまた出掛け  
ベレー帽孫にかぶせてうれしが  
夢に見た茶色のベレー黙つてた  
ベレー帽板につくころはげ上り  
ベレー帽似合ぬままにしまひ込み  
六十才の抵抗ベレー帽でのし歩く  
娘のような後添といくベレー帽  
横顔が吉田茂に似たベレー帽  
ひとり来てひとり帰るベレー帽  
ベレー帽家業は息子委せにし  
ベレー帽重役だったとは知らず  
ベレー帽脱げば夫婦と見てくれず  
ベレー帽茶瓶の蓋のように脱ぐ  
ベレー冠れば後ろ姿もあたかし  
ベレー帽気さくな顔にしてくる  
ベレー帽売れない詩を書き続け  
三代目親に逆らうベレー帽  
ささやかしおやじのベレー帽  
ベレー帽投書マニアとして余生  
ベレー帽悲しい顔は持つていず  
ベレー帽だけに若さが残つてる  
ベレー帽似合う程には画けぬ筆

花宏 一徹 凡 薰 万 美 金 河 言 葛 牧 双 維 久 綾 喜 茶 花 天 牧 儀 聡 徳 鬼 多 静 万 水 河 笑  
梢子 舟 母 治 吉 風 的 三 産 城 人 案 久 房 女 代 梢 笑 一人 舟 夢 三 宏 子 志 馬 案 客 産 痴

▼前号紹介の在阪柳社の主幹会議は、ただ各柳社の横のつながりを綿密にするためであつて、特に文化祭川柳大会にこだわらない。名  
称は「大阪川柳クラブ」という。  
▼第二十五回長野県川柳大会は、川柳六文銭上句会を兼ねて、四月十八日(日)午前九時から上田市民会館で開催。兼題、素足・たにかい・かけら・月曜日(各題二句)雑詠(二選者へ二句ずつ)、投句は二百円封入して上田市材木町臣川南月宛。  
▼番傘わかくさ二十五周年記念田中桂太樓句集発行川柳大会は六月六日(日)正午から、大阪市東成区役所三階区民ホールで開催。兼題、奈良の寺・紳士・海・盃洗・続く・銀婚(五月五日着便殿守、投句料三百円)発展・多芸・ステップ・景気・萌える・握手(当日午後一時半締切)各題二句、投句並びに投句指定用紙の請求は、大阪市生野区猪飼野中一丁目一九、田中桂太樓方番傘わかくさ川柳会宛。  
★  
▼堺・若芽合同句会―三月十三日午後六時。協時報掲載「農協」五句以内。八木摩太郎宅  
▼南海川柳会―三月十八日。題・個人タクシ  
ク・いやがらせ・制限。ナンバ高架下、親和クラブ。  
▼大阪川柳会―三月十九日(金)午後六時  
題・若い力・美・予定・活字。松崎町二丁目  
以和貴荘。投句は金井文秋宛。

## ▼柳界短信 ▲

定年のあとをベレーの似合う顔  
冬きびしベレーに似合う職が無い  
恩給で食つてるといふベレー帽  
ベレー帽善人という相となり  
通勤の姿に遠いベレー帽  
善人のイメージ乗せるベレー帽  
君が代を歌わぬ男のベレー帽  
小松園 史 呂 今 雨 一 二 三 聡 夢

## 「明治日本の思い出」

定価 九八〇円

右は日本スキーの父として仰がれているテオドール・フォン・レルヒの手記を五カ  
年余の歳月を費し、医学博士・中野理氏が  
原著から忠実に且つ絶妙な日本語に翻訳さ  
れたものである。スキー愛好者は勿論、ス  
キーに関心のない方でも外人の眼に映じた  
当時の日本観として興味つきぬ名著である  
と確信する。一本を是非座右におすす  
め。川柳塔編集部でとりつぎします。

## 「現代南画の描き方」

定価 二千元

川柳塔社創刊号から毎月表紙に麗筆を賜  
わっており、直原玉青画伯このたび標  
記の著書を発行されました。これは先年ご  
発刊になり大好評を博された「新しい南画  
と俳画の描き方」の姉妹版でありまして南  
画に志すものにとつて欠く事の出来ない双  
翼であります。

ご希望の方は本社編集部でお取り次ぎ致  
します。振つてお申込みおすすめ致します。  
(生々庵)

# 老地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

清水白柳追悼句会

於尼崎労働会館

席題「坂」

西村芳川選

坂舗装されて落葉が馴染めない  
背信の坂で太陽見失なう  
坂をのぼり切っても冬がついて来る

席題「桶」

田中好啓選

水の桶ぬけて女が逢いに来る  
桶もたぬ兵士の愛は撃たれたり  
麦の意地桶となるものになし

席題「タクト」

西沢青二選

出し抜けの太鼓へタクト強く指し  
雌力マキリのタクトが冬陽にぶら  
妻のタクト笑ってやろう従いてゆく

兼題「悔い」

西尾 葉選

ひと言を悔い歩巾のかえり道  
解ればいいんだと悔いを案にさせ  
逢うことの悔いに火となる性をもち

兼題「列」

田中秀果選

活きてゆく列に夫婦の轍を読む  
鉄砲を持ち戦わぬ列に居る  
気の利いた子分で列の外にいる

兼題「脱ぐ」

増井不二也選

足袋を脱ぐ女かすかに息を吐く  
山茶花の雪と脱ぐ音聴いている  
獄衣脱ぐその日の空を忘れまい

兼題「ポケット」

青木三碧選

ポケットの中の硬貨がしゃべり出す  
喪の年の明けるポケットの残り火に  
ポケットの遺書も軍歌が唱えない

兼題「白」

岡橋宣介選

雪景色鳥は下手な舞いをまい  
君は逆し鉄砲百合のかたむきに  
人妻のざんげを盗む白い風

玉造川柳会

西出一栄報

白柳さんの想い出(二句)

信じたくない死仕事も手につかず  
大阪の作家が減った寒い冬  
遅刻した客に人気をうばわれる  
遅刻して教室の顔ふり向かせ  
嫁き遅れ母と責任なすり合い  
女性上位パバより馬が遅く起き  
遅いのも或る日は長所かと思ひ  
税務署が帰って遅い昼食となり  
かたつむり遅い歩みを気にしない  
気を効かせ遅らせてゆく地位となり  
遅うて軽きボリーナスやんちゃい  
景気よく積んだ初荷の旗が立て  
ガラ空きで吊り皮気儘な音を立て  
不機嫌なハタキに揺れる小鳥籠  
思慕憎む女に夢の影が揺れ  
ブランコのリズムの通り空が揺れ  
結婚へ心の揺れは隠し得ず

妻と子を敵に廻して父揺れる

工事中大きく揺れるマスコット

妻の座に揺れるものあり世の流れ

揺れに揺れ徹夜にもちこむ本会議

これからはバスが揺るとガイド詫ひ

知らん顔されると女心揺れ

ヘドロの海揺れ公害の渦憎む

片腕を残し本人死んでゆき

片腕となった飾らぬ妻が居る

片腕と見込んで奴が足すくう

片腕へ妻にも云えぬ肚を割り

片腕とおだててチンピラから搾取

片腕の次長信じて盲判

片腕になってと男甘えられ

片腕になってあげると言い寄られ

片腕に頼む息子が家を捨て

片腕にしたら石橋叩きすぎ

片腕をパパに預けて初すべり

片腕の人とは思えぬ程稼ぎ

片腕の秘書の美貌を妻が妬き

扶養家族として片腕にぶら下り

南大阪川柳会

計画のどこか計算狂ってる

計算に入れてなかった情が沸き

人間ぎりぎりケモノのように生き

この辺までどうやとぬけ道強いら

暫くは言葉も出ない久しぶり

貸そくれと云い出しそうなくし振り

雑踏を通る財布を握りしめ

気のもめる子供がいちばん親思い

雑踏を抜けて淑女の顔になり

酔

酔

酔

鬼遊

一歩

静歩

水京

柳宏子

文秋

芳川

句念坊

宏枝

富久一

静馬

竹青

好一

風仙洞

誓二

あいき

一舟

あいき

鶴声

儀一

智子

金井文秋報

柳宏子

葵水

水京

古方

智子

好郎

文秋

一治

酔

酔

酔

酔

ざりざりのとこで年輪やはり冴え  
惜しまれて去る花道の第一歩  
ざりざりの刻まで債鬼駆け歩き  
ざりざりの線まで夫婦和をのこし  
去る年へ悔は残らず神おがむ  
日めくりが五枚になった気のおせり  
言い訳けもせずに辞表を置いて去く  
物価高計算違いと思う日々  
内輪もめ隣りはテレビ消して聞き  
ざりざりで話をそらす悪だくみ  
久しぶり共に肩書ある名刺  
去に去にとママゴトはもう喧嘩  
雑踏のなかへ自分を忘れに出かけ  
大年が猪年の春を迎えられ  
雑踏へスリも刑事も目が光り  
ラッシュ縫いわがハンドルに自信  
損得のない計算に肩凝らし  
ママのへそで目鼻がついた大晦日  
暗算をしつつ買い足す市場籠  
千代

備前川柳社 目賀芳月報

ひとすじの光私が生きてる道 清春  
光る靴はいて行先告げず行き 三与子  
事故現場夜行テープがまだ光り 芳明  
光ってる程度で席順決められる 胡風  
速雷は夜空に光っただけで消え 浄美  
闇の夜を光ってホタル捕えられ 柳子  
ささやかな倅守る灯の光り 宗郎  
逆光線でしたと写真詫びてくれ 鈴一声  
売約済み貼った作品よく光り 正坊  
忘年会防犯灯の世話になり 伊久野  
うその出る口から光る金入歯

金園光らせ冷たくあしらわれ  
現ナマがキラリと光る十二月  
ガス灯の光り夜台の味もよし  
燈明の光へきようの無事をつけ  
新雪にいどみ純潔のまま眠り  
純潔が女にばかり求められ  
高知川柳社(高知市) 川竹松風報  
招待券損にならない人に出し  
酒やめる話へ耳を持たぬ妻  
歩道橋登校以外は渡らぬ子  
文化の日天気晴朗なれど寝る  
風寒し車券の無駄が舞うてゐる  
安サラー私朝寝を許さない  
特売に財布はたいて無駄も買  
無駄づかい孫と一緒に叱られる  
姑の愚痴に出てくる嫁の無駄  
肩書が友情少しづつつけず  
友情の匂いなくしつづける  
くらしの差女の友情うすれゆく  
再起する起点となった友の情  
友情の深さに泣いた不倅せ  
友情のふれあい過疎に根をおろし  
買物の重さも主婦の十二月  
年内に着く小包の日を数え  
年内の話ですよとつめられ  
年内に退院余後を案じられ  
川柳かわかやま 垂井葵水報  
水道へかわつてからの腹工合  
借りる気もないのに家の間取りきく  
せまくとも古くともよい住心地  
大家族合掌構え飛驒の雪 竜

備前川柳社 廿五周年  
久米雄句碑除幕式記念

吉永町文化川柳大会

日時 四月二十五日(日) 十時から  
会場 浜田久米雄宅で除幕式、十一  
時から吉永町中央公民館で大  
会に移る。十五時半閉会予定  
柳話 中島生々庵 川柳塔主幹  
兼題

赤飯 西尾 栞選 川柳塔社  
両手 大森風来子選 川柳岡山社  
脂(あぶら) 丸山弓削平選 弓削川柳社  
土 石原 伯峰選 広島川柳社  
骨 横山 一声選 備前川柳社

席題 三題当日発表兼席題共各二句  
賞品 兼席題共三才呈賞 出席優先  
記念品 出席者全員に呈す  
会費 三百円 昼食を呈す  
投句 句箋(4×18センチ)に一句ず  
つ記入表面に雅号明記、四月二十日まで  
に会費百円(二十円切手五枚)同封して  
備前川柳社(〒七〇九一〇二 岡山県和  
気郡吉永町福満)あて送付のこと。発表  
誌後送。

主催 備前川柳社 後援 吉永町

遭難の子奇跡夢見る親ごころ

福松

変人といわれ程の義理固さ

延伊知

義理欠くと思えば重い気の疲れ

静子

義理立てた金で義理欠くはめになり

城石

もう家も建ったと狭い土地が言い

智

頭張らうデデン虫さえ家がある

増蔵

他人の家建つのを楽しんでる通勤

弘生

葬儀屋も仏へ義理の手を合せ

十郎

観光地故郷の言葉にふりかえり

泰子

観光の伊賀の屋敷は霧の中

昇

奇跡など信ぜず今日も主婦であり

千寿子

すれてない等と売出す観光地

一光

けしからぬ映画も見せる観光地

陽一

熱愛の夜明けた水道ほとばしる

太茂津

舗装路のヒビから奇麗な水が湧き

葵水

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

味噌汁に今日の一步を励まされ

河股

味噌汁の温みの中で出社する

天笑

味噌汁が妻の舌から出来上り

一治

義理欠いて肩身がせまい早寝する

修史

汁めくめ待つ諦めよ妻の座よ

痴亭

味噌汁に飼慣らされた妻の味

好保

インスタント味噌汁犬も半分は残し

史好

冷戦の間も味噌汁だけは出し

虎生

味噌汁は母の仕込みで嫁く自信

弥生

味噌汁の足らぬ日もあり子沢山

生長

みそ汁の匂い座禅の鼻をつき

酔々

独身寮味噌汁母の味で食べ

つき子

特売のネクタイ一度しめたり

鶴声

子の出世農耕の鋤にも力入り

敏雄

男だと肩身でわかる女形

双楽

言訳けのすし踊らせて父帰る

鬼遊

太鼓腹で肩身も広い里帰り

太庸

親方の犬まで肩身広く見え

喜風

寄附帳でケチの肩身が直見え

儀一

味噌汁の匂いの中での嫁姑

比呂路

陣笠に居ても派閥に依る肩身

比呂路

味噌汁にジャコ味のする母の作

秋水

嫁ぐ子の肩身広く無理算段

勝恵

拗ねている後姿も踊りの手

小松園

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

髭も剃り港が近い大漁旗

一步

弁解は聞きたくはないあてはず

吸江

栄転の旗で左遷も送つとき

桂馬

旗色の悪さをパパは咳で逃げ

吐来

観光地旗がたよりの人の波

松浦

優勝旗手にした人へ貰い泣き

武吉

孤立する旗にスクラム崩れたり

光影

明治節という一徹の旗を出し

酔々

宝くじはずれるまでの夢でよし

岳太

退院へ旗振る笑顔涙る病床

忠虎

優勝旗手にする喜び涙となり

竜太

平和論唱えて反旗ひるがえし

一治

浩宮以下にもついで旗を振り

好郎

河内川柳会 香川酔々報

誠実が残っています平家村

酔々

再起する君の誠を信じよう

虎声

腑に落ちぬ数字ソロバンでも同じ

一治

愚痴つても仕方ないにまた愚痴り

鶴翠

磨いてはならぬ骨董とは知らず

儀一

誠実な人格リーダーとしてまとめ

奈々

生きてゆくネオンの影で靴磨く

鬼遊

力走の耳に雑音聞こえてず

好郎

ウイロー社 (ハワイ)

驚いた豊かけ出す俄か雨

拜山

子に腹かす親父の靴が間に合わず

万里歩

驚きはなかつた筈の遺産が出

快夢起

又殺しかと警察驚かず

泉水

驚いてばかり老母の京だより

魔花麗

齡聞いて驚く精力絶倫さ

北海

さし足の孫に驚くゼスチュー

笑有

驚きの世相へ燈明ゆるぐ日々

浮草

大声へ昼寝びっくりとび上り

曉舟

あらまよと妻の驚き古なじみ

春風

人の肩叩いて驚く人ちがいに

あき坊

驚きは過ぎた歳月振りかえる

峯円

世のうつり驚く方が笑われる

蒼蛇楼

和歌山短詩型文学クラブ

三幸報

おでん屋の前で寒がる癖があり

陽一

ストーブの火加減上手な寒がりや

佐知子

老眼鏡恩師に借りて同窓会

淳子

公害に枯葉の季節狂わされ

太茂津

公害の元兇多額納税者

葵水

天国は公害知らぬと人は言う

凡夫

師の恩を別れ行く今朝思い出し

蘇風

恐かった恩師小さく見える年

正夫

二年余の縁短かし恩師の計

富子

公害を忘れて花の下で酔い

酔々

寒がりが廻したチャネル寒中水泳

のぶこ

寒がりや猫と同年じ背中して

和美

公害をあくまで突こう猪の年

城石

公害を洗えば政党浮き上り

公作



今日だけは公害もなき三カ日  
寒がりが電気毛布を強にする  
寒がりのおしゃれ忘れた日が続く  
一億の民公害に悩まれ  
勇次

南海電鉄川柳会(大阪市)

辻圭水報

高速に入れば何時しか胸もそり  
税金で出来た高速縁がなし  
情報も高速心身落つかず  
高速に來てもガイドは唄わされ  
高速で無茶に飛ばすも十八九  
高速の素通り駅のおをち風  
高速化旅を味ないものにする  
こまつ柳壇

来年の暦をめくる婚約期  
来年へ望みをかける子の誓  
週刊誌もう来年をさわきたて

山上千太郎報

茶島

大島

久代

来年を口ぐせに言う斜陽社長  
来年の命を頼る種子をまき  
来年は勝負すると忘年会  
年つまり心ばかりが追う理想  
人前で挨拶あせればなおつまり  
年の瀬もつまると何か追われるよう  
つまるだけつめて帰省の赤字線  
腹割って話せば敵も金づまり  
押しつまりましたとのぞく懐ろ手  
つまらない話しへお茶をのみ過ごし  
心得ていたが式日押しつまり  
おでん屋につぶれていた以外の荒れ  
大吹雪じつと耐えてる冬木立  
荒れかかる胸三寸の裏おもて  
年賀状切手シートの運もなし  
選り別ける普通はがきで来た賀状

弘子

芳子

信子

秀子

佐一

吉枝

真紗子

一二三

勝野

押野

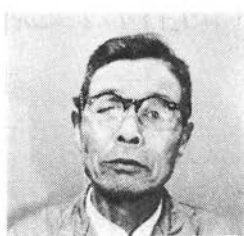
富美子

たか子

辰二

東風

来年を口ぐせに言う斜陽社長  
来年の命を頼る種子をまき  
来年は勝負すると忘年会  
年つまり心ばかりが追う理想  
人前で挨拶あせればなおつまり  
年の瀬もつまると何か追われるよう  
つまるだけつめて帰省の赤字線  
腹割って話せば敵も金づまり  
押しつまりましたとのぞく懐ろ手  
つまらない話しへお茶をのみ過ごし  
心得ていたが式日押しつまり  
おでん屋につぶれていた以外の荒れ  
大吹雪じつと耐えてる冬木立  
荒れかかる胸三寸の裏おもて  
年賀状切手シートの運もなし  
選り別ける普通はがきで来た賀状



津秋六花

# 雅号ぶつちやけばなし(81)

るっか

つあき

大陸生活九十三年、自分の家を四回建てた。儲けたら建て、手形に行き詰つたら売りで、全く紆余曲折の十三年、最後は敗戦のお蔭で丸裸、神様め俺を何度試すのか、よしそれならばと、雅号の雪窓を雪達磨にし、幾度転んでも必ず起き上って見せる、起き上る度に肥って起きやする、と云うのが雪達磨のいわれ。私は明治四十三年一月八日の早朝大雪の時に母の腹から飛び出したらしい、で親から戴いた名が雪夫。どうした事かこの雪がたまらなく恋しいので号にも雪をつけたものである。五平太川柳社を創設したのが二十八年五月、三年ばかりたった或時霞乃先生からのお便り、雪達磨決して悪いとは言わないが、同人も相当増えた事でもあり、一般の人に川柳を誤解させぬためにも、雅号を替えたら?どうして?雪が心残になるなら、雪は六角なので六花とした。(養鶏業・六十一歳)

商いの忙しき賀状を子にまかせ  
年賀状自筆で届く書道塾  
賀状より先に年始の顔を出し  
川柳わかやま  
重井葵水報

スタートの我子をかさがすメガネかけ  
スタートは美学由紀夫の花と散り  
立春の卵をホステスと笑い合い  
新春ごとに親を追越す背と酒  
湯加減の不足言えない貰い風呂  
石仏を盗んでゆく石ブーム  
銀行の中で盗人養成所  
猪に牙を忘れた児の賀状  
日向ぼこボケの蕾に紅きざし  
真心を包むお店でよく流行り  
雑詠の中へ忘れ得ぬ一句  
候補者になる人笑顔多くなり  
肺ガンとなるとタバコに書けもせず  
明日あれば男貧しき籤を購う  
何事も年明けのから片がつき  
松の内夫婦のリズム子が乱し  
猪に手綱つきたい年が明け  
見送りの中に冷たい顔を見る  
失恋の心気一転かき眉毛  
障子張り夫と心通うとき  
椿一輪活けて日本の素顔です  
鼻かゆくかゆく一日になにもなし  
耳欠けて柔和におわす石地蔵  
無趣味かと思えば石のコレクション  
漬物の石なみにされ日曜日  
ポケットの硬貨昨夜の音がする

照代

竜

四四坊

ふみよ

延伊知

栄

福松

佐一郎

みさお

峡

静子

凡夫

智

芳朗

泰朗

太茂

津

城石

寛一

吉彦

千寿子

陽一

守夫

弘生

のぼる

十郎

葵水

# 句集「的」刊行記念

日時 三月六日(土) 午後六時  
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目  
電話 622・1275 番

柳 話

兼題 「グリーン車」

「レール」

「二人」

「的」

席題 三題 (題と選者は当日発表)

会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

4月の兼題 「青春」 「マンモス」  
「手ごろ」 「ぬれ衣」

## 募 集

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽 (10句) 川村 好郎 選

課題吟 (各題5句以内)

「無医村」 福井 野迷路 選

「郵便」 吉岡 通児 選

「ニワトリ」 津秋 六花 選

★川柳塔の投句は本社同人に限りません。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽 (10句) 川村 好郎 選

課題吟 (各題5句以内)

「冷凍」 木村 涼人 選

「純情」 坂井 三葉 選

「ブレイキ」 友淵 貴山 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

## ★三月は「的」刊行記念句会

定価 百八十円 (送料六円)

半年分 千 百 円 (送料共)

一年分 二千百六十円 (送料負担)

昭和四十六年二月二十五日印刷

昭和四十六年三月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪二七一一三九八五番  
郵便 大阪三三三六八番



新芯気鋭  
いつでも細く書ける硬質サインペン  
黒・赤・青  
1本50円

ライオン ジェットペン

福井商事株式会社



## ・ペンペン草・

★三月号というところ、これまでは女流作家にご登場ねがったのだが、こうスペース・マヒに追いこまれると手も足も出ない。せめてもう8ページほしい。

★そんなわけで賛助会員名簿がまた出せなくなった。こんどは電話も入れる予定をしているので、おついでの時、知らせていただけるかと助かります。

疲労・肩こり・神経痛に

# アリナミン<sup>®</sup>A

☆5ミリ錠・25ミリ錠・ほかに50ミリ錠 ☆食後にどうぞ

☆詳しくは医師や薬局・薬店でご相談ください。



59

★空席になっていた編集長に橋高薫風さんを迎えることになった。

★薫風さんとは長い編集仲間である。「川柳雑誌」時代、故路郎先生から「若い編集部員を一人入れたいのだが……」とご相談をうけた。そして「将来有望な作家だから……」とつけたされたものである。それが薫風さんである。

★この種の同人誌というのは、発行日まで伏せておくものもあって、それが事前にわかってしまうと読者の興味が半減する場合がある。これらのオキテを薫風さんならよく知っているのだ、どんな相談でもできると思う。

★よその人たちから一番人氣があるのは薫風さんである。とくに他社との交流ではNO・1でもある。

★ぼくは薫風さんと違って、うちの小集にも顔を出さない。たまによそから原稿を頼まれても書いたこと

がない。まったくもって近所づきあいのわるいことオビタダシイ。

★弁解するようだが、毎月、六枚までの小モノばかりだが、三十本から四十本書いている。実のところ川柳はそんなにたくさん作っていない。これも食わんがためとあれば諒とされよ。

★三月になると、わが家の豊三枚ほどのせまい庭の柿の木に、淡い黄緑の芽がちよっぴり顔を出す。この柿の木は松江へ行った娘たちのこどものころ、たべて捨てた柿の種が、一本の木に生長したものである。毎年この柿の木から生命力の尊さを教えられるのである。甘い富有柿だ。

★話が松江へ飛ぶが、米子の千代さんや瑞枝さんが、ときどき三歳の恋人の交を訪ねてくださる。身寄りのすくない娘たちが、どれほど力強く感謝していることか。

★あの記録的な大雪の数日

品質でリードするクラブハウのシャツ



倉敷紡績株式会社

前、松江の日赤へ入院している木次の芳子さんを見舞うお二人が、家へ寄って恋人を連れて行ってくださったが、すっかりおなじみになっ

て、この恩返しには「超えてる」雑誌を作らなくちやあ……。

★アポロ14号が月面からカラーで中継されてきた。神秘への冒険だなんて云わな

いで、卒直に科学の力に脱帽したい。

▼冬の間お世話になったものの一つに肩かけがあります。

▼外出用のものは不二田さんの奥様が編んでくださったもの、これは秋田実先生の奥様と同じものだそうで、黒地にブルーと白の線をあしらった見事な感覚です。

▼夜、室内で愛用しているのは米子の千代嬢からのプレゼントでこれまた上品な色彩。

▼二夫人の香りが包む肩細しー (小谷葉子)

あ……。やっぱり世間がいうように古いのかな。一 (不二田一三夫)

黒潮躍る

紀州路へ



〈白浜ゆき〉 なんば発時刻

急行 きのくに6号…(毎日)…12時51分発

急行 きのくに11号…(毎日)…16時40分発

急行 きのくに7号…(土曜)…13時21分発

〈白浜・新宮ゆき〉 なんば発時刻

急行 きのくに2号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時15分発

●きのくに6号ときのくに7号は座席指定席券を 他の列車は座席整理券を発売

お問い合わせ・南海交通社  
 (641) 8686 (341) 5038

**南海電車**

料理も電話も

**551**

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋  
 堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストア